
すばかり

こけもも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すばかり

【Nコード】

N3733BA

【作者名】

こけもも

【あらすじ】

女子高生作家として人気者だったが盗作騒ぎで引きこもった女流作家、夢子。

ある日、病気で死んだ初恋の相手からもらった手紙が出て来た。

住所は地図に載っていないミステリアスな場所。

夢子は手紙の相手の死ぬ間際に冷たくしてしまったことを悔やみ、手紙の住所が気になってしょうがない。

だが、ミステリアスな場所に自分で行く気にはなれなかった。

そこで、知人たち3人に代わりに現地を見てくれるように頼むこと

にした。

3人とは、

趣味のオカルトグッズを販売している男・雨宮と、
ノーテンキな自己啓発系書籍ライターの未来、
チャットで知り合ったハーフの美形少年ゆー！。

とある文学新人賞第一次予選通過作。

（前書き）

実在の場所や人物とは関係ありません。

ネットのオカルト掲示板とくに犬鳴峠の話題をたくさん参考にして書きました。

読むと寂しくなるかもしれませんが、要旨としては明るい希望や愛を表現しています。

だいぶ前に書いたもので、そのときの流行などの影響も受けていて、読むに耐えない部分もあるかと思います。書き出し推敲足りてないところあります。すみません。

ハッピーバイブレーション。

この18年間一回も、掃除機をかける以外は掃除しなかった部屋をとうとう掃除したところ、見たくもなんともない手紙が出て来てしまった。

そもそもこの部屋を掃除しなかったのは、この手紙が発端だったことを思い出してしまった。

最初は机の引き出しに放り込んで見ないようにしただけだったのだが、やがて手紙のことを考えたくないばかりに、机も部屋全体も掃除しようという発想自体、起きないようになっていた。

そしてすっかり掃除をしないことが自分に定着してことの始まりを忘れた頃に、掃除しようなどと思い立ったから手紙を思い出すことになったのだ。

ざっくりと胸に刺さる手紙。

これまで封を切る勇気がなかった手紙。ぺらぺらになって折ジワがついている。スヌーピーの柄で、少し退色している。

「18年も開封しなかったの？ 君ね」

同棲しているジュン君が呆れる。

「だって。病死した子の手紙なの」

何の説明にもなっていない。

「君って」

ジュンくんの視線が一度、スヌーピーにあたって離れた。以前ジュンくんが「うちの母親はぬいぐるみやキャラクターグッズには、興味がない」と言っていたのを瞬間、思い出した。洋服を箱に入れる作業を再開するジュンくんの洋服箱は、整然と詰めたモノトーンの服でチェッカー模様になっている。

わたしたちは来月の始めに、まだ籍は入れていないが、真新しい家に引っ越す。

ほぼ一月の時間はあるけれど、すぐ使わないものを今から梱包していた。ジュンくんはクローゼット、わたしは机まわりを片付けている。

「この手紙を開封して、捨てる」

わたしは宣言した。

手紙の端に鋏を入れる。細く切って開けた。

「撃墜王だ。可愛いね」

ジュンくんが封筒の絵柄をいつの間にか再び見ていた。

さっきも一度見たはずなのに、このひとは今やつと撃墜王に気づいたのか。撃墜王とは、スヌーピーが扮するパイロット。赤いバナナをなびかせ、茶色いヘルメットを被ったスヌーピー。

便箋を開いてみると、子供の大きな文字が鉛筆書きされている。その字面を見ただけで、どきりとした。

「ゆめこちゃん ネコのけしゴム ありがとう！

うれしかったです。げんきでね。

ぼくは、きょうから〇〇県にすみます。

〒〇〇一〇〇 〇〇県鏝井郡青葉町大字鹿分 すえながれい』

「そっか、てて手紙を書かなきゃ。でもっ。今、コノコはいないんだ。」

「君、さっきから何でそんな嬉しそうなの」

さっきからわたしは上気し、いつもより早く喋っていた。浮かれているみたいだと自分でも思った。でも、震えていた。

「熱いアップルティーいれる……」

「うん。でも、後でもいい。具合が悪そうだね？」

「寒いのに汗が出る」

わたしの声は掠れた。

お湯を沸かし、アップルティーを何とかカップ二つ分作ったが、結局ベッドに入った。

横でアップルティーを飲み干すジュンくんは、洋服の整理を終えていた。

毛布にくるまって、れい君のことを考えていた。均整のとれた容姿の子供だった。

担任の先生がある日「れい君は、病気で入院したのち自宅療養をしている」と言った。

それからしばらくして、れい君が一日だけ学校に来た。それは、今思えば、もう助からないからみんなに挨拶に来たということだったのだろう。

その、一日だけ登校した日に、れい君がくれた手紙がうちにある手紙だった。開封して処分すると言ったが、結局、置いてある。

朝、ジュンくんが仕事に出かけた後、わたしも自宅で仕事だ。

いつも使っているノートパソコンを起動させる。

起動音のファの音が部屋中に広がった。

白いノートパソコンの画面全体が光り、見慣れた壁紙とアイコンが映し出された。

わたしは、高校時代に文学賞を受賞している。都内の女子高生であることを強調した帯つきで、退廃的な絵柄で装丁されたわたしの本が一冊。当時、新聞の全国版に書評が掲載された。横顔の近影が中性的で良かったと友達には評判だった。もらった印税は、合計でおよそ五百万円になった。女子高生にしては大金だ。

写真家がわたしを丁寧撮影し（俯いて微笑んでとか、両手を後ろで組んで寂しそうな表情してみて、とか）、その写真とともにサブカル系雑誌でコラムの連載が始まった。

女子高生作家の日記という内容だ。食べたお菓子とか、観た映画とか、洋服のこととか、他愛ないものを書くように編集者に言われていた。書評や社会問題について真面目に書くと削られ、または大幅に修正されることもあった。

コラムのタイトルは「夢現???ユメウツツ」というのを考えて出

したのだけれど、編集段階で「ゆめこのゆめいろメロンソーダ」になった。好きな飲み物がメロンソーダだったところから取ったのだと思うけど。見本誌が届いて初めてそのことを知り、そのとき飲んでいたメロンソーダを、噴いた。笑いたくも何ともなかったのに。ブラウスに人工着色料が散り、淡いしみを残した。

連載の第一回目ならぬ「一杯目」は、テスト勉強の話。わたしは進学校に行きながらも勉強はあまりしない生徒というスタンスを採用している。実は結構勉強できますと遠回しに知らせる話も「五杯目」くらいに出て来る。

三年続いたコラム連載は、加筆して書籍になり、わずかばかり熱心なファンがついた。それから十年経ったが、ファンはそのコラムの話を、いまでもネットの文芸サイトの掲示板に書き込む。掲示板は時間が止まっているみたいだった。

ネットには、毎日、新しい話題が大量に入って来るのに、波の静まった海の中には何年経っても同じ話題があり続けることもできる。何度も同じ種が落ち、芽吹き、成長し、枯れたと思ったらまた種が落ち、現実の時間を忘却して、当時の思い出が既視感のある育ち方でゆるゆる伸びて行く。苔だ。青い月影、湧き水にぼんやり光る苔の花。昼間の花とは違うんだ。一番楽しかった時期にとどまろうとしている。しかも回を重ねては次第に人の集まりに勢いが衰え、話題がほうぼうに拡散し消えて行こうともしている。

拡散に抗って二作目三作目とわたしは小説を書いたが、四作目は単行本にならなかった。趣味で集めていたチベットの香に関するエッセイを出し、それが何十万円かにはなった。

わたしは現在、ライターをしながらたまに小説を文芸誌に発表するという状況だ。これで生活していると言える収入に届くか届かないかくらいの金額を貰っている。

文芸誌には新しく女子高生作家が登場し、推定一億円ほど稼いできました。わたしはすでに女子高生ですらなく。

「純粹に、才能が評価される状況になって良かった」

なんて熱心なファンは掲示板に書いてくれている。わたしは、まだそう思っていない……。最初から純粹に評価されていると思ってる……。そんな、終わったみたいと言わないで。

今やっている仕事は、ネットショップの商品にコピーをつける仕事だ。

商品コピーの仕事は、執筆者の名前が出ない。わたしだからと依頼されたわけではない。他のライターも何人か手伝っている。単価の安い副業だが、合計したら本業よりたくさんやっている。じゃあ、こちらが本業か……。

送られて来た商品サンプルを実際に使ってみて、その感想をレポートしコピーをつける。ゆうパックの白い箱を開ける。中からサンブルの入った小さな箱が次々出て来る。「たくさんある」と思った。どれから手を付けようか迷った。

走り書きではなくトメハネのはっきりした字で「願望の箱」とボールペン書きされた箱を手にとった。白箱の中からまた箱が出て来た。箱を包んでいるエアパッキンを解く。

両手の上に乗るくらいの直方体で、電子楽器のアンプやミキサーを思い起こさせる機材を小さくした物が現れた。目盛りのついたダイヤルがついているが、単位らしきものは全く書いていない。真鍮のプレートと黒いプラスチックの箱で出来ている。

パソコンに向かい作業中のファイルを開く。今日する仕事は、エクセルのファイルにコピーを書き込んでいく作業だ。

が、エクセル作業に入る前にわたしは、インターネットで「鎧井郡」を調べることにした。気になるのだ。それに、さっと終わると思っていた。

地図を開いて〇〇県の地図を出し、「鎧井郡」をクリックしたが、また同じ地図が現れた。過剰だと思いつつも一度クリックしたらやっぱり同じ画面だった。ページそのものが変わっていない。

探しているのは「鎧井郡青葉町大字鹿蹄」だが、なかった。鎧井郡の傍に、「青葉市」があると思ったがよく見ると「若葉市」で異

なるし、そもそもページには「町名をクリックしてください」とあるので、「鎧井郡」でも「若葉市」でもクリックしたところで目的のページは得られない。

地図は諦めて、ワード検索をすることにした。「鎧井郡青葉町大字鹿蹄」をググって見ると、「郵便番号のページ」、「wiki青葉町」、ダム関連のサイトが並んだ。れい君の家の場所を知りたいだけなのに、目的に合うサイトが出てこない。

「鹿蹄」で検索しなおした。

グーグルの検索結果が開いた。124,120 件の結果があった。検索ワードと合致しているところが太字になっている。まず最初に気になったのは、次の文だ。

地図にない村??鹿蹄村

地図にない村。

地名が現在使われていないというのは何となくさっき分かったが、地図にない村とはどういうことなのだろう。他の検索結果に目を通す。

心霊スポット探訪鹿蹄村

鹿蹄山と鹿蹄村 — Wikipedia

心霊スポット特集 鹿蹄遊園地

鹿蹄山

夏の恐怖体験鹿蹄山を検証!

鹿蹄ニユーホテルもみじ苑

鹿蹄山温泉旅館・六花庵 (ろっかあん)

大本山鹿蹄山七宝滝寺公式ホームページ

温泉なら〇〇県随一の秘境の名湯・鹿蹄温泉センターへ

大阪・泉州のブランド豚 鹿蹄ポーク

親子でたのしいハイキングコース九州版鹿蹄山

……どう言ったらいいんだろう「ひ、ひええ」とか、「怖ええ!」とか、そんな感じだろうか。わたしは、「鹿蹄」という太字と「霊」の文字がぞろりと並んだことに怖くなった。よく見ると、何ら恐怖の要素のない見出しや福岡県と関係ない鹿蹄山も混ざっているが、今は、それは見ない。

窓の全面から午前中の白い光が射し込んでいて、静まり返っているのが気になって来た。無地の白いカーテンが目に入る。れい君が退院して一日だけ学校に来たときのことパッと映った。均整のとれた姿をした子供だったのだが、学校に再び現れたときは、見る影もなく超肥満児になっていた。

わたしは、さらにクリックしてページ移動する。検索結果はまだまだあるのだ。

『……二〇〇六年二月十一日、鎧井郡青田町と同郡若田町が合併して若葉市になりました』という結果を見つけたので、クリックしたら自治体のサイトだった。温泉や溪流などの観光案内、生活情報、市役所からのお知らせなどが掲載されている。

れい君の家の当時の住所はもうない。今は2006年の秋。同じ年に変更になるなんて、ちょっとだけ偶然だ。

最初のページに戻って、見出し以外のところをざっと読む。

『地図にない村。鹿蹄村……〇〇県の鹿蹄山にある遊園地（閉鎖）

のそばに、通常だったら絶対に見落とすような小道があります……

— 11k — Cached — Similar pages

「……」の部分は結果を表示するスペースの都合上なのか、中略されている部分だ。他のも読む。

『〇〇県にある鹿蹄山は、地元では有名な心霊スポットだ。特に鹿蹄ホワイトランド跡地は霊を見た人という人が後を断たない。鹿蹄村はその近くにあり……— 28k — Cached — Similar pages』

『心霊スポット巡り。東京??青山霊園 千駄ヶ谷遊園地 千葉?

? ……福岡?? 鹿蹄村 ホワイトランド跡地 鹿蹄ダム……—
37k — Cached — Similar pages

『夏の心霊特集。鹿蹄ホワイトランド跡地付近では、肩を叩かれる、
携帯が圏外になる……謎の村があるなどのうわさがある。我々は検
証すべく……— 14k — Cached — Similar
pages — 104k — Cached — Similar
pages』

『鹿蹄村って、ダムに沈んだはずだけど。……のほうだろ。狂った
人々が住んでいて、よそ者が入って来ると鍬を持って追いかけて来
る……— 31k — Cached — Similar pa
ges』

これら検索結果に出て来たサイトのひとつをクリックしてみた。

『鹿蹄山は地元では有名な心霊スポットです。山頂にあるホワイト
ランド跡地がそうです。現在は封鎖されています。ゲートには錠が
かけられているものの、ゲートわきの冊を越えて園内に入る者が後
を断ちません』

テキストの傍には遊園地の写真画像が載っている。

最初にゲートの写真があった。両側を雑木林に囲まれた道路があ
り、均した土の道路が遊園地の入口に続いている。「お城」をファ
ンシーに模したパステルグリーンの城壁がゲートになっている。赤
い三角屋根のついた見張り塔が左右のてっぺんにひとつずつついて
いる。左側の塔の下にはチケット売り場だったのか赤いテントの屋
根がついた窓がある。右側の塔の横には「たのしいイベント」と書
いたパネルが掲げてあり、さらにその下には洋風の小窓がある。城
壁は板で、ところどころ剥がされている。ゲートの真ん中には壊れ
たベンチや窓枠が低く積まれている。

写真の傍には『以前から霊が出るといわくつきの遊園地。何年か
前には中学二年生の少女が家庭教師に来ていた少女に殺害される事

件が起きています。』と書いてある。

写真を見た途端、肩が重くなった気がし、頭痛がしてきた。霊のせいとは思いたくない。ちょっと冷静になった。写真も見慣れて来た。そもそも霊を怖がるなんて不謹慎だと思う。

画面をスクロールすると二枚目が現れた。怖い。クリックする握力を弱めないままに慌ててスクロールバーを再び上方にスライドさせて一枚目の画像に戻した。

わたしは席を立ち、キッチンからパイナップルの缶づめとガラス皿とデザートフォークをひとつずつ取って来ると缶を開けながらテレビをしばらく見た。クイズ番組の再放送をやっている。優勝者が決まり、賞品の「モナリザの微笑み」がプリントされた番組特製マグカップを渡された。「すごい。かわいい」とにっこりしてみせるタレントが映り、その上に番組タイトルと終という白文字が表示された。すぐに短いニュースが始まる。

なみなみとシロップの満ちた缶の中に小さいフォークを差し入れ、スライスパイナップルを刺し、缶と皿の間の空中を移動させる。刺したパイナップルは、するりと抜けて皿の上にパシャッと落ちた。テーブルに零れたシロップをティッシュで拭き取る。一回、息をつく。テレビはワイドショーになっていたのですね、陽気なバカ騒ぎを探した。チャンネルを変えると、明るいキッチンが映った。洗剤のコマーシャルだ。ちよつと前まで巨乳アイドルだったタレントが歌いながら食器を洗っている。グラビアアイドルとしては、もはや役割を果たしかけている彼女の巨乳？巨乳は母性の象徴なんだ。胸の大きな女性は母性に富んだ温かい人が多いんだ。胸を見なくても彼女の魅力はその母性にあると分かるんだ。おっぱい礼讃。おっぱい讃歌？と、適当なことを思い浮かべて気持ち落ち着かせた。「おっぱい礼賛、おっぱい讃歌」は、インターネットの掲示板でよく見かけるフレーズだ。

「おっぱいら……」

今初めて口に出して言おうとしたら違和感があった。普段、おっ

ばいを話題にすることがあまりない。おっぱいという言葉自体、わたしには気恥ずかしい。

それから再びパソコンの前に座った。

さっきちょっと見えた二枚目の写真は、物の散乱した室内みたいだった。ゲート内部という文字が添えられているのも読み取っていた。

わたしの手が汗をかいている。ティッシュをくしゃくしゃとチツチャクさせて捨て、さっき開封した「願望の箱」をつかんだ。気が紛れると良いなあ。スイッチを入れる。いくつかあるダイヤルの一つを回しながら、パソコンの画面を再び見る。

遊園地ゲート内部。さっきの城壁の中だ。洋風の小窓が見えるので右側内部だと思う。

扉の開いたスチールの書類棚がいくつかあり、床一面にファイルや書類が散らばり積もっている。ゴミ箱らしきスチール缶や段ボール箱、ビニールの雨合羽、パンフレットや卓上カレンダー、伝票みたいな紙類などが映っている。必要なものは搬出してあるのだろう。散らかってはいるが、それぞれの小物はきれいな状態のものばかりで、踏み荒らしたような跡もない。

特にミステリアスなことはなかった。

「三枚目の写真」という文字をクリックする。

おぼけやしきの外観だった。横長にした箱型の建物にレンガ模様の板を張り巡らせて造った洋館だ。二階建てに見せかけた窓は木で打ち付けられ、壁にはひび割れやレンガの落ちたところがある（すべて絵だが）。ベランダや入り口傍にはミイラやドラキュラの人形が立っていて思い思いのポーズをしている。廃材が入り口の前に投げ出されているが、外観に最初から廃墟みたいな演出をしているので、どこから剥がれたのか分からない。

『お化け屋敷には霊が出やすいと言われます。』

と説明書きが添えられている。霊だからおぼけやしきに？ わたしが霊だったらわざわざおぼけやしきみたいな怖い場所には行かない

……。誰かに「好川さんは霊だからオバケヤシキにいそう」とか決めつけられたら、淡く殺意に似たものを覚える。

スクロールすると四枚目の写真があった。暗色の板が立ちはだかっていた。光が極細の直線を描き、そこに隙間があることを示している。壁と同じ色を塗ったふすまみたいな板が一枚あると分かった。『内部に潜入してみました。狭い通路を進んで行くと、やがて突き当たりますが、右手にこのように隠し扉が。営業していた当時は、壁のように見せかけて、人が来ると開閉するようになっていたようです。』

ふと、手に持った「願望の箱」のダイヤルがかすかに引っかかった。そこで、初めて「願望の箱」をよく見てみる。ダイヤルは、電子レンジのつまみと似た物で、ただし「願望の箱」は左右どちらにも回せるようになっていた。すんなり指先で回すことができていたのに、ダイヤルの滑りがかすかに重くなった気がした。回らないわけではない。箱の上面には、ダイヤルがふたつと、名刺サイズの四角い穴がひとつ、真鍮のプレートがひとつ、取り付けられている。付属物として、U字磁石が添えられていた。箱はとても軽い。

向こう側の見えないおぼけやしきと、かすかに引っかかる感触のするダイヤル。でもすぐにまた、引っかかりはなくなり、ふたつともスムーズに回るようになった。

目を上げると、窓から午前中の光が射し込み、白いカーテンのレースをいっそう明るく浮き上がらせていた。

わたしは、自分の中から、何処かで覚えた感覚が取り出されるのに気がついた。すぐ思い出した。総合病院の神経内科内に設けられたカウンセリング室の、待合室の壁に掛かっていた絵を見たときの感覚だ。絵の作者とタイトルは分からない。おぼろげには、人の名前ふたりを「○○と○○」みたいに並べたものがタイトルだったと思う。

その病院は、元は中核市の駅前であり廃墟のように外観が古くなっていたのだが、移転してそこからバスで十分ほど行ったところに

ある田畑ばかりの町で再開した。新しい建物は、高級ホテルに見劣りしなかった。ピンクを基調にしたモダンな内装も心地よい。

件の絵には、外国の家の扉が大きく描かれていた。扉は青く、木製の手造りに見える。その家に住んでいた人とともに経年した扉は暮らしていく上でついた傷が残っている。塗料を塗り重ねたムラがある。美しい青。青い扉の他には暗闇をまとった茶色の壁がある。壁には古いフライパンやぼろ布が掛かったままで、床にはへこんだバケツやたらいが置いてある。

ダークカラーに浮かぶ扉は、閉まっている。絵の扉をじっと眺めても、開かない。中の様子は分からない。扉を詳細に眺める。これは、中学校の美術の教科書に載っていた。

思い浮かべたことを、強引にこじつけるのはよすべきだ。おばけやしきを塞ぐふすまと、この青いドアを並べて考察する理由はない。おばけやしきの内部は、もし行って、見たいならば見る可能性がある。現実にあるものだからだ。それに、このサイトだって他のページには、別の角度から撮った写真がアップされているかもしれない。サイトを作った人物が実際に見て、レポートしているんじゃないか。

次の写真を見ようと、スクロールするとスクロールバーはすぐ止まり、ページ下部であるそこには、「続きを読む」という文字があったのでクリックした。

「Not found」という太文字と白いページが現れた。中身はなかった。リンク切れだ。

わたしはさっきの絵の作者とタイトルを調べたくなった。すぐ見つかった。ワイエスの『アルバロとクリスティーナ』だった。

ブラウザの履歴に戻って、検索結果の中からまた適当にクリックする。

『談話室キタムラ』

というタイトルのサイトが現れた。サイト内にある「『地図にない村』まとめ」というメニューをクリックした。

— — — — —
 — — — — —
 — — — — —

↑このページは、『談話室キタムラ』内の掲示板で立ったトピック『地図にない村』のレスをまとめたものです。

??目次??

第一章 ことの発端 マドレーヌ貴婦人と名乗る者、登場。

第二章 地図にない村 「この先、大日本帝国憲法が通用しません。」

第三章 遊園地跡 アイン・ソフ・オウルの撮影した画像。
 あいき&アインのサイトはここ。

第四章 鹿蹄村 勇者待ち。

第六章 ダム 勇者待ち。

最終章 (作成予定)。

— — — — —
 — — — — —
 — — — — —

↑第一章↑

ことの発端は、マドレーヌ貴婦人と名乗る人物の発言から始まった。

『地図にない村』?? 発言者「マドレーヌ貴婦人」／発言日4月1日18時01分

はじめまして。あたくしマドレーヌ貴婦人が、ボンネットを被ってしゃなりしゃなりとドレスをたくしあげながらやって来ましたよ。

テレビ局のウェブサイトに『オルタナ科学少年探偵クラブ』という番組のページがあります。その掲示板ログに残っていた鹿蹄山の話が気になります。

ペーストします。これです。↑

「地図にない村」

〇〇県鎧井郡青葉町の鹿蹄山のことです。僕はふもとの大学に通う者ですが、自転車で山道を走っていた際、あの周辺が非常に奇妙な場所であることに気づきました。以前から鹿蹄山にある遊園地の跡地は地元では有名な心霊スポットですが、それ以前に奇妙な土地のようなのです。

山を跨ぐ国道〇〇号線を行くと遊園地が続く道と分岐するところがあるのですが、分岐してすぐのところに、普通に走っているとぜったい見落とすようなところから道が出ています。その道を少し行くと叢があるのですが、よく見ると公園のあった跡があります。こんな誰も遊びにこないような場所になぜ公園があるのか異様です。それにその公園自体異様で、空き地の中に鉄柵で台形に囲った狭い土地があり、その真ん中に滑り台が置いてあるだけです。遊具は他に何もなく、草が半端でなく伸びきっていて、滑り台も柵も完全に錆びて、何年くらい雨ざらしになっていたのかも分かりません。子

供が入って遊んでいる形跡どころか人が来る気配も一向にありません。何だか不安になった僕は、そのまま引き返して来ました。

後日、大学の先輩に聞くと、その脇道を知っているというのです。あの道は、入って行くとどんどん道幅が狭くなり、それでも進んで行くと、古い民家や廃屋のかたまって建っている村みたいな場所があるんだそうです。しかし、地図で確認するとどこにもそんなものは載ってないのです。地図上に存在しない村です。地図にない村なのです。

しかも道の途中には「足を踏み入れるべからず。この先、大日本帝国憲法が通用しません。」という立て札があるんだそうです。

村に入ると広場のようなところがあり、傍には廃屋が建っているんだそうです。

先輩が友達数人と興味本位でこの村に来たときのことです。

自転車を停めて広場を歩き回りながら廃屋を写真に撮ろうとしたところ、石が降って来て足下に落ちたんだそうです。吃驚して上を見ると廃屋の二階の窓が開いている。はっとして周りを見ると、いつの間にか他にも三、四人くらいの男がこっちを見ているのです。先輩達は身の危険を感じ、自転車を放ってひとまずその場を走って離れたそうです。後で車で行って自転車を回収したのですが、刃物のような傷でタイヤが切り裂かれていたそうです。

別の日、先輩達が明るい時間にもう一度村に行ってみたところ、村は静まり返っていて誰もいない。入り口を板で塞いである時代があった家や、煙突がついている小屋、そして普通の民家っぽい家があったそうです。

広場みたいな場所には、何か四角い物が地面に落ちていて、近づいてみると、割れた手鏡で、その横にはなぜか裏返しにきちんと揃

えたミュールが置いてあったそうです。

そういえば以前、この地域で、家出中の少女が行方不明になったという話もありました……。

先輩の一人が言うには、ある資料によると、この村は、警察などの国家権力の介入ができない「特別保護なんとか指定」とか言われる地域と記されていたそうです。その資料とは、大学図書館の郷土資料コーナーにある本に付属していた小冊子でした。後日、その本を確認しに行くとなぜかなくなっていたので、図書館の人に聞いてみたところ、地下の書庫に入っていて一般の学生は書庫に入れないということでした。

そういえば、ホワイトランド跡は雑誌に取り上げられるなど全国的に有名な心霊スポットなのに、テレビ局の取材が来たことは一度もありません。

また、以前から、鹿蹄山にはUFOがしょっちゅう飛来しているという話があります。

一刻も早く調べてください。

興味本位でこの山に行く若者が急増しているそうです。」

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

ここまで読んで、デタラメだと思ったし、最後の二行に引っかけた。「願望の箱」のダイヤルを持つ指もさっきから引っかけかきを感じていた。ときおり、かすかにダイヤルが重くなるのだ。そうい

う作りなのだと思った。ハンドメイドだし。「願望の箱」は販売サイトの運営者がひとつひとつ手作りしている。手作りだからって雑な作りである理由にはならないのだが、運営者の日頃の几帳面を考えると、この引っかけりは使用にさしさわるものではないのだろう。サイトを読みながら片手でマウスを操作し、空いている手で「願望の箱」のダイヤルを回す。ダイヤルがときおり重くなる。またすつと軽くなるので、サイトを読む。再びダイヤルが重くなる。

願望の箱に説明書はついていない。ネットショップ内の会員ページに書いてあると言っていた。ログインするにはIDとパスワードを入力する必要がある。今読んでいる『談話室キタムラ』を読み終わってからログインすることにした。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

ナマドレーヌ貴婦人と名乗る者が投下したミステリアスな村の話題に、サイトを訪問した人々が徐々に反応し始めた。レスをいくつか抜粋する。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

『no title』発言者 no nameさん／発言日4月1日18時01分

地元の者です。
友達から聞いたのですが、遊園地近くの畦道を進んで行ったら、男

が現れ、鉈を持って追いかけて来たそうです。よそ者が近づくのはとても危険です。

あと、畦道に入ったあたりから、携帯はどここの会社のも圏外になるそうです。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

『no title』発言者 no nameさん／発言日4月1日18時09分

何かそういう村の話、ばあちゃんに聞いたことある。ずっと昔、江戸時代頃にあの辺りで疫病が流行って、外の世界と行き来が閉ざされたんだって。で、外界と遮断されて自給自足するようになって、独自の風習を形成した。祭のときは能面をつけて昼夜なくトランス状態になるまで舞踏する奇習があるって郷土資料にも載ってるそうだよ。でもすごい昔の話だそうだし、今はもう生き残ってる人があるかどうか。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

『no title』発言者 no nameさん／発言日4月1日18時18分

日本だよ？ 地図にない村なんてありえなくね？ 航空写真撮ったら一発で分かるじゃん。

行方不明になった家出少女の話、何か聞いたことある。地図にない村なんて、B級ホラーみたいだな。村が本当にあるか見て来て、レポートしてよ。

1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	12
13	14	15
16	17	18
19	20	21
22	23	24
25	26	27
28	29	30
31	32	33
34	35	36
37	38	39
40	41	42
43	44	45
46	47	48
49	50	51
52	53	54
55	56	57
58	59	60
61	62	63
64	65	66
67	68	69
70	71	72
73	74	75
76	77	78
79	80	81
82	83	84
85	86	87
88	89	90
91	92	93
94	95	96
97	98	99
100	101	102
103	104	105
106	107	108
109	110	111
112	113	114
115	116	117
118	119	120
121	122	123
124	125	126
127	128	129
130	131	132
133	134	135
136	137	138
139	140	141
142	143	144
145	146	147
148	149	150
151	152	153
154	155	156
157	158	159
160	161	162
163	164	165
166	167	168
169	170	171
172	173	174
175	176	177
178	179	180
181	182	183
184	185	186
187	188	189
190	191	192
193	194	195
196	197	198
199	200	201
202	203	204
205	206	207
208	209	210
211	212	213
214	215	216
217	218	219
220	221	222
223	224	225
226	227	228
229	230	231
232	233	234
235	236	237
238	239	240
241	242	243
244	245	246
247	248	249
250	251	252
253	254	255
256	257	258
259	260	261
262	263	264
265	266	267
268	269	270
271	272	273
274	275	276
277	278	279
280	281	282
283	284	285
286	287	288
289	290	291
292	293	294
295	296	297
298	299	300
301	302	303
304	305	306
307	308	309
310	311	312
313	314	315
316	317	318
319	320	321
322	323	324
325	326	327
328	329	330
331	332	333
334	335	336
337	338	339
340	341	342
343	344	345
346	347	348
349	350	351
352	353	354
355	356	357
358	359	360
361	362	363
364	365	366
367	368	369
370	371	372
373	374	375
376	377	378
379	380	381
382	383	384
385	386	387
388	389	390
391	392	393
394	395	396
397	398	399
400	401	402
403	404	405
406	407	408
409	410	411
412	413	414
415	416	417
418	419	420
421	422	423
424	425	426
427	428	429
430	431	432
433	434	43

家らしきものがある。村とはいえないけど。家が三軒。遊園地の近くから細い道が出ていて、突き当たりのようなところ。

1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	12
13	14	15
16	17	18
19	20	21
22	23	24
25	26	27
28	29	30
31	32	33
34	35	36
37	38	39
40	41	42
43	44	45
46	47	48
49	50	51
52	53	54
55	56	57
58	59	60
61	62	63
64	65	66
67	68	69
70	71	72
73	74	75
76	77	78
79	80	81
82	83	84
85	86	87
88	89	90
91	92	93
94	95	96
97	98	99
100	101	102
103	104	105
106	107	108
109	110	111
112	113	114
115	116	117
118	119	120
121	122	123
124	125	126
127	128	129
130	131	132
133	134	135
136	137	138
139	140	141
142	143	144
145	146	147
148	149	150
151	152	153
154	155	156
157	158	159
160	161	162
163	164	165
166	167	168
169	170	171
172	173	174
175	176	177
178	179	180
181	182	183
184	185	186
187	188	189
190	191	192
193	194	195
196	197	198
199	200	201
202	203	204
205	206	207
208	209	210
211	212	213
214	215	216
217	218	219
220	221	222
223	224	225
226	227	228
229	230	231
232	233	234
235	236	237
238	239	240
241	242	243
244	245	246
247	248	249
250	251	252
253	254	255
256	257	258
259	260	261
262	263	264
265	266	267
268	269	270
271	272	273
274	275	276
277	278	279
280	281	282
283	284	285
286	287	288
289	290	291
292	293	294
295	296	297
298	299	300
301	302	303
304	305	306
307	308	309
310	311	312
313	314	315
316	317	318
319	320	321
322	323	324
325	326	327
328	329	330
331	332	333
334	335	336
337	338	339
340	341	342
343	344	345
346	347	348
349	350	351
352	353	354
355	356	357
358	359	360
361	362	363
364	365	366
367	368	369
370	371	372
373	374	375
376	377	378
379	380	381
382	383	384
385	386	387
388	389	390
391	392	393
394	395	396
397	398	399
400	401	402
403	404	405
406	407	408
409	410	411
412	413	414
415	416	417
418	419	420
421	422	423
424	425	426
427	428	429
430	431	432
433	434	43

マピオンに載ってる？

[illegible]

23

8時54分

市販の地図に載っています。うちにあった住宅地図にも載っていました。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

十気になる点十

・ ホワイトランド（閉鎖された遊園地。遊園地跡とも。略称←白、シロラン、ホワラン、ホワイトなど）の横の小道を入ると、地図上に存在しない村がある。

・ 「この先、大日本帝国憲法が通用しません。」という立て札がある。

・ 広場に手鏡とミュールが置かれていた。行方不明の家出少女の物か。

・ 国家権力の介入できない「特別な何とか保護地域」？

・ 江戸時代頃、この地で疫病が流行ったため外界から遮断され、独自の風習を持つようになった自給自足の村？

・ よそ者が来ると、鉈を持って追いかけて来る？

十ここに取り上げたレス以外にも、地元民や現地に行ったことがあるという人からの書き込みが次第に集まって来た。

それによると、

「ヘリコプターが月に二度ほど鹿蹄山の方角に飛んで行くが、国が密かにしている集落があり、食料を集落の住民に供給している」、「肝試しで遊園地跡の中に入るものが後を断たない」、「遊園地跡

のゴーカートがあったところのトンネルをくぐると、何者かに肩を叩かれる。外に出ると、服が泥で汚れている」、「遊園地跡内外に電話ボックスがいくつかあるが、どれからも一一〇番がつながらない」、「数年前、遊園地跡で少女が家庭教師に殺害された事件があった。新聞でも報道された有名な事件なせいか、以後、遊園地跡に霊が出るって話が一気に広まった」、「遊園地が出来る前は墓地だった。近くには戦時中に作られた隧道がある」、「テレビの特番で遊園地に来た有名霊能力者が“早く帰りましょう。ここは本当に危ない”と言ってロケが中止になった」、「鹿蹄村というのは存在しない。昔、実在した鹿蹄という集落は、現在、ダムの底に沈んでいる」ということだった。

憶測によるデマが殆どを占めると思われる。

はたして、鹿蹄村は存在するのだろうか。

うわさの真偽を確かめ、鹿蹄村の謎を解く勇者の登場を、われわれ掲示板利用者は待つのだった。

(次ページに

続く)

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

十第二章十

地図にない村 「この先、大日本帝国憲法、通用しません。」

『俺』発言者 アイン・ソフ・オウル さん／発言日4月1日18時55分

[illegible]

1	1	1
2	2	2
3	3	3
4	4	4
5	5	5
6	6	6
7	7	7
8	8	8
9	9	9
10	10	10
11	11	11
12	12	12
13	13	13
14	14	14
15	15	15
16	16	16
17	17	17
18	18	18
19	19	19
20	20	20
21	21	21
22	22	22
23	23	23
24	24	24
25	25	25
26	26	26
27	27	27
28	28	28
29	29	29
30	30	30
31	31	31
32	32	32
33	33	33
34	34	34
35	35	35
36	36	36
37	37	37
38	38	38
39	39	39
40	40	40
41	41	41
42	42	42
43	43	43
44	44	44
45	45	45
46	46	46
47	47	47
48	48	48
49	49	49
50	50	50
51	51	51
52	52	52
53	53	53
54	54	54
55	55	55
56	56	56
57	57	57
58	58	58
59	59	59
60	60	60
61	61	61
62	62	62
63	63	63
64	64	64
65	65	65
66	66	66
67	67	67
68	68	68
69	69	69
70	70	70
71	71	71
72	72	72
73	73	73
74	74	74
75	75	75
76	76	76
77	77	77
78	78	78
79	79	79
80	80	80
81	81	81
82	82	82
83	83	83
84	84	84
85	85	85
86	86	86
87	87	87
88	88	88
89	89	89
90	90	90
91	91	91
92	92	92
93	93	93
94	94	94
95	95	95
96	96	96
97	97	97
98	98	98
99	99	99
100	100	100

[illegible][illegible]

— — — — —

＋さらに、あいきと名乗る者が登場する。ここから、「アイン」と「あいき」の「物語」が始まる??

— — — — —
— — — — —
— — — — —

『no title』発言者 土器にどきとした。 さん／発言
日4月1日18時59分

軽く武装していけよ。山だし何かあるかわからん。食料とか持っ
け。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

『no title』発言者 アイン・ソフ・オウル さん／発言
日4月1日19時01分

食いかけのスニッカーズがカバンに入ってる。武装……弓道着と飛
ばない弓矢ならあるが。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

『no title』発言者 no name さん／発言日4月
1日19時08分

遊園地は霧とかすごいと云ふから、明るい時間にしてはどうだ。
其れと、道着なんか着てゐると返って目立って狙はれさうだよ。

— — —
— — —
— — —

『では』発言者 アイン・ソフ・オウル さん／発言日4月1日1
9時13分

道着はやめておきます。

— — —
— — —
— — —

『no title』発言者 no name さん／発言日4月
1日19時14分

一人で行くんですかあ。心配ですう。くれぐれも無茶だけわしないで
くださいね。自分も近くだったら行ったのですケド。誰かアイン
さんと一緒に行ってageて……。

— — —
— — —
— — —

『no title』発言者 あいき さん／発言日4月1日21
時50分

アイン・ソフ・オウル、あたし、一緒に行っただげるよ。

あんた、いまどこ。合気道のあいきと覚えてて。他に行く人いない？

— — —
— — —
— — —

『市内だよ』発言者 アイン・ソフ・オウル さん／発言日4月1
日22時33分

今、ネットカフェからこれを書いてる。さっき行こうとしたけど、
この時間から行くと帰りのバスがないので断念。

来る人いるんなら、明日、九時に京堂線の鹿蹄駅そばの「モンパ
ルス」前で待ってる。まずはホワイトランドに行ってみます。あ
いき君は来るのですか？

↑それに対する、あいきの返信はなかなか書き込まれない。待つて
いる間に、サイト利用者の空気が荒涼とし始めた。

— — —
— — —
— — —

『no title』発言者 no name さん／発言日4月
1日22時47分

アイン・ソフ・オウル、あたし、一緒に行ったげるよ。
って言うておいて結局チキンかよ。

— — —
— — —
— — —

『no title』発言者 no name さん／発言日4月
1日22時48分

アイン・ソフ・オウル、あたし、一緒に行ったげるよ。
って言うておいて結局チキンかよ。

— — —
— — —
— — —

『no title』発言者 no name さん／発言日4月
1日23時11分

二度も同じこと書き込むなよ。お前のちんげは直毛か。

— — —
— — —
— — —

『no title』発言者 no name さん／発言日4月
1日23時13分

意味分かんないよ。直毛だったら何なんだよ。関係ないこと書き込むお前も同じレベルだぞ。これ書いてる時点で、おれも変わらないけど（LOL）。

— — —
— — —
— — —

『no title』発言者 no name さん／発言日4月
1日23時13分

何だよLOLって。

— — —
— — —
— — —

『no title』発言者 no name さん／発言日4月
1日23時15分

LOLも知らねーのかよ。このテイノーム。

— — —
— — —
— — —

『no title』発言者 no name さん／発言日4月

1日23時15分

知らないよう。だから教えろってんだい。きい。

— — —
— — —
— — —
— — —
— — —
— — —

『no title』発言者 no name さん／発言日4月
1日23時17分

何でも人に聞くなよ。テイヘンが。

— — —
— — —
— — —
— — —
— — —
— — —

『no title』発言者 no name さん／発言日4月
1日23時19分

僕はパリ第一一大学出身ですがLOLというのは聞いたことがあります。

— — —
— — —
— — —
— — —
— — —
— — —

『no title』発言者 no name さん／発言日4月
1日23時23分

— — — — —

「あいきからの返答を待つ間に勃発した小さい戦争。それはやがて「ペニスのサイズを偽る男がいるがあれはどうしてなのか」という議題に変わっていく（詳細は略する）。

結局、あいきからの書き込みがなされないままに、ちんこの話に終始して夜は明けた。雨が降り出し、小鳥も囀らない朝だった。

そんなことより

「他に名乗りをあげる者も結局はいなかった。

「アイン単独で鹿鳴山に向かうことになるのだろうか。」

「朝になって、我々の期待を背負ったアインが約束通りに現れる。

「談話室キタムラ」が再び明るい活気を取り戻した。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

『いま』発言者 アイン・ソフ・オウル さん／発言日4月2日0

8時30分

京堂線の鹿蹄駅そばの「モンパルナス」前。携帯でこれを書いている。中でしばらくあいき君を待ちます。モーニングセット五八〇円。モンテクリストサンドウィッチとカフェオレだ。まあまあオトク。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

[illegible]

『あなたの』 発言者 no name さん／発言日4月2日08時32分

勇気に感服です。ホワイトランドや鹿蹄村に実際に行く人が現れるなんて、この掲示板をロムし続けて良かった。

でも危険なことは本当に今回だけにしてくださいね。アインさんが無事で戻って来ることを祈っています。

[illegible]

『無事で!』発言者 アイン・ソフ・オウル さん／発言日4月2日08時34分

アインはおれらを裏切らなかった。ああ、おれ感動したよ。本当に
行ってくれるなんて。おれもロムってて良かった。

無事で戻ってこいよ！

1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	12
13	14	15
16	17	18
19	20	21
22	23	24
25	26	27
28	29	30
31	32	33
34	35	36
37	38	39
40	41	42
43	44	45
46	47	48
49	50	51
52	53	54
55	56	57
58	59	60
61	62	63
64	65	66
67	68	69
70	71	72
73	74	75
76	77	78
79	80	81
82	83	84
85	86	87
88	89	90
91	92	93
94	95	96
97	98	99
100	101	102

十など、続々とアインの登場に歓声が起き、無事を祈るのだった。

十と、そのとき…？

— — — — —
— — — — —
— — — — —

『いま』発言者 アイン・ソフ・オウル さん／発言日4月2日0
8時57分

あいき君来た！ やった！
目の前でモンテクリストサンドウィッチを食べてるー。
そいじゃこれから二人でホワイトランドに行って来ます！

— — — — —
— — — — —
— — — — —

十あいきの予想外の登場に、我々は沸き立った。
十彼らはまるでこれからデートをするカップルのようにも思えた。
しかし、行き先は幽霊が出るという廃墟遊園地。我々にできること
は、二人の無事の帰還を祈りながら待つことのみ。

章に続く

— — — — —
— — — — —
— — — — —

〈第三

— — — — —
— — — — —
— — — — —

わたしは、『談話室キタムラ』をブックマークに入れようとした
が猥雑な言葉やへんにまとめようとしているのが嫌でブックマーク
を止め、だけどやっぱりURLが分からなくなるのも嫌だったので
結局ブックマークに入れてブラウザを閉じた。

「願望の箱」のダイヤルは引っかからなくなっていた。箱を置き、
キッチンに行く。

カップにフィルターをセットして作る一人分のコーヒーをいれて
戻り「願望の箱」の説明が書いてあるページを開く。「願望の箱」
を販売している不思議グッズ通販サイトの中にある「会員用ページ」
だ。自分のIDとパスワードでログインするようになってる。IDはy u m e k o（夢子）でパスワードはm e l o n^{メロン}にしてある。
ログインすると次のテキストが現れた。

●願望の箱

「この箱のシステムは電気回路によるものではありません。
ただし、パーツとして電子機器を添えてあります。」

*システムである回路図は、紙にプリントアウトしただけでも効果
が期待できます。電子機器を添えることにより、効果の倍増を期待
したものが『願望の箱』です。」

●使用方法

「ダイヤルが引っかかるところに書いてある数字を記録してくださ
い。この数字をレートといいます。記録したレートにダイヤルをセ
ットし、電源を入れると、願望に合う効果が期待できます。」

*この箱により『何かを測定』しているわけではありません。レ

トには単位がありません。これは使う人によって数字の意味合いが変わるからです。物理学のように、存在するものを測定するのは異なります。」

●効果的な使い方

「『願望の箱』側面スイッチにある電源を、毎日、一定時間入れてください。十分程度で十分です。それにより」

読みかけで電話が鳴った。

「はい」と言いながら受話器を耳に当てると少し無音を置いてから「ピヨロピヨロ」と遠くで鳴った。白く細長い紙が吐き出される。どきりとしたが、プリントアウトが終わるのを待ってさっと干切った。

ファックスは、編集プロダクションからだった。一昨日、打ち合わせで初めて会った編集者の名前が書いてある。

地図だった。グーグルの地図から東京都大田区の西馬込周辺を検索して二万一千分の一にしたものがプリントしてある。

パソコンのメールボックスにメールが到着した。

「取材の仕事、引き受けてくれませんか。ライターのみなもとアリスさん取材して三ページにまとめて欲しいのですが」

みなもとアリスさん。源有理さん？ 一度会ったことがあるな。アパレル業界誌、「繊維月報」のライターだ。かつて制服に新しい繊維をいち早く取り入れたのがわたしの学校で、当時、制服を着て取材を受けたので印象に残っている。

今度はわたしが取材する立場か。

時計を見た。もうすぐお昼の十二時だった。

電話をして源有理さんに取材の都合を聞いたら、「今日これからすぐ来るなら少し時間がある」という返事だった。わたしは「ライターの好川と申します。」と名乗り、以前会ったことがあるとは特に言わなかった。

船橋から総武線で浅草橋に行き、都営浅草線に乗り換えて泉岳寺を經由して西馬込に着く列車に乗ることにする。所要時間は、五八分だ。電車に乗っている小一時間で、鞆に入っている本の何ページを読めるか予想した。結局は、読まなかった。わたしの鞆にはよく本が入っているが、鞆に入れていて読み終えたものはあまりない。洋裁の本や調律の参考書だったり、哲学書やレト・ロマンス語群で使用者数最大のフリウリ語のテキストだったり、気分によって入れている本は変わる。車窓から白い光が差し込み、紫外線が気になってしょうがなくなるような席が空いていた。そこに座った私は、れい君のことを考えていたのだった。

何月頃だったか。気がつくといれい君の欠席が続いていた。

先生がある日、れい君は入院したのだと言った。みんなで千羽鶴を折った。

断片的に覚えているだけだが。瞬く場面は、れい君の均整の取れた姿形、きれいに微笑んだ顔、休み時間に他の男の子にかっさらわれるようにして校庭のボール遊びに出かけて行くところ、など。それらは、字がきれいで全部の科目が得意、白い歯を見せて笑っている、洋服も持ち物も洗練されている、というイメージにふわりと包まれている。まんがの登場人物で言うなら出来杉くんのだ。

ある日、また先生が、

「れい君が退院しました。明日学校に来ます」と言った。

次の日、先生とは違う女性が教室に現れた。きれいな雰囲気的女性で、れい君の母親だった。れい君の姿が見つからなかった。見たことのない子供が女性の陰に隠れるようにして立っている。

先生が

「じゃあ、れい君は、コウ君とミツ君の間の席に」

と、れい君のことが好きでまわりついていた生徒の傍の席を指差した。

れい君の母親に隠れるようにして立っていた子とその席に着いた。

わたしはまだいい君を探していた。

白く丸っこい子供がいる。

肌が透けるくらい白く、見たことないほど肥満している。

肥満というより、見たことのない身体の形をしている。つきたてのお餅に豚足の厚ぼったい脂肪の質感を足して作った人形だ。

わたしは理解をした。わたしが知っているれい君の顔とは全く違う姿になったのだ。その外見からは、元気だった頃のれい君との共通点を探し出すことは完全にできなかった。目も口元も違っていた。ただ一点、にこっとした表情に愛らしい印象が残っているのだけが、れい君との共通のものだった。

その日、ボール遊びをして、室内ゲームをして、給食の時間が終わったら、れい君は自宅に帰った。

れい君を迎え入れ見送った後の教室は変に活気があった。浮かれているみたいになっていた。

「元気になったら元通りになるよね」とうわずった声がした。いつも、れい君にまわりついていていたコウだ。

後ろの席の女の子が、休み時間に「わたしはれい君が好きだわ」と笑顔でわたしに言った。

後で先生がわたしを呼んだ。

「れい君から『なめ猫』の消しゴムをあげたお礼の手紙を預かっています」と全然笑っていない顔で言った。ほんとうはやたらに物をあげたりするのはいけないことです。というようなことも言っていた。

「でも今回はいいとしましょう」

それから笑顔になって、手紙をわたしに渡した。

れい君が元気だったある日に、消しゴムをあげたんだった。

わたしは、家に帰ると、手紙の封を切らず、押し入れの中の、アルバムやこれまで学校で描いた絵などを入れてある箱に放り込んだ。それから手を洗った。

その手紙は、引っ越したり片付けたりする度にいろんな場所に移

って行ったが、いま現在、わたしの自宅にあるのがそうだ。

西馬込の改札が出る。

文士村商店街を抜け、スーパーを目印に並木道から出ている坂道を登ると、坂が急になり大きな家の並ぶ区画に出た。中でも凝った庭のついた家は周囲の建物より新しく、目立っていた。源有理さんの自宅だ。

ピンク色のグラマラスな小花柄ワンピースを着た女性が門の前で待っていてくれた。挨拶を交わして、門から玄関に通され、屋内に入る。庭に面した壁面がガラス張りになっている廊下を通して応接間に行くと、女性がいきなり

「手狭になりましたね、引っ越したんですけど、どうです、この家？」

と言った。この家の主人がこの女性なのだと、わたしはやっと気がついた。

「有理さん？ 雰囲気がつ」

わたしは、何年も前に一度会っただけの自分のことを有理さんが覚えてはいないだろうという不安を持ちながらも、そう言った。

「一回、お会いしたことがあるんです。私」

慌てて補足した。慌てる理由なんてないのに。

「もちろん覚えていますよ。夢子さんのこと」

有理さんは私に向けて右手を伸ばした。

わたしは差し出された手を掴んだ。

久しぶりに握手をした。

どきっとした。毎日、ジュンくとキスしているし、ジュンくんの休日には手をつないで並んで歩いているけれど、今この握手の感触は慣れなかった。イヤでもなかった。わずかはイヤでもあった。

「すてきです」

すなおに褒めた。部屋にはたくさんものがあり、有理さんは以前と違い過ぎたので、どれを褒めるか選ぶのに迷って、有理さんと部屋の中の両方を見て言った。

「ありがとう」

手を胸の前で組んで有理さんが声をあげる。可愛らしい仕草だった。

「以前お会いしたとき、もう十年経つのですね、モノトーンが好きとおっしゃっていて、古着の黒のワンピースが似合っていました。スニーカーとよく合っていて、小物の合わせ方もすてきで羨ましかったです」

そのワンピースは五百円で買ったお気に入りだと言っていた。

以前の髪型はベリーショートだった。髪は黒かった。すっぴんだった。

今は肩より長い。ウェーブがかかって、明るい茶色だ。眉が整っていて、肌は白くなめらかで血色よく、唇が潤っている。

「覚えててくれたんだー。そうそう古着とか着てたんだわたし。古着はね、好きなんだけど、もう着ないの」

「なるほど。他のお洋服も見せていただいていいですか」

今日ここに来たのは、「成功している女性の普段の生活」というテーマのインタビューで、「いくつか私物を写真に撮って、そのアイテムへの思い入れを話してもらって下さい。」と、クライアントからメールで指示されていた。

有理さんはウォークインクローゼットの扉を開いた。ワンルームくらいの広さがある。ハンガーを掛けるところが壁面全てにあり、真ん中には靴や小物を置く台がある。ブティックみたいだ。

「ふわっとした軽い色目がいいわ。パステルブルーやピンクがいちばん、わたしのしっくりくる色。クリーム色やバイオレットもすばらしい。女性らしくて柔らかいシルエットのお洋服がいいの。それから古着は前の持ち主の想念がついてまわるから、着ないの」

想念がついてまわる、などと非科学的なことを有理さんはあっさり言った。

有理さんはクリーム色のシフォンのスカーフを掴んだ。ブランド

のロゴが見える。

「これはパリの本店で買ったの」

天女の羽衣のように纏い、くるっと回転して言った。

「スーパーカリフラジリスティックエクスピアードーシャス！」

唐突に叫ぶ。

わたしは、一步、後ろに下がりそうになったが、踏みとどまった。

「スーパーカリフラジリスティックエクスピアードーシャス？」

メリー・ポピンズの歌だ。この単語は、固有名詞であり、形容詞だ。意味は知らない。メロディはバイキングーZの歌に使われている。

「そう、それ」

有理さんが微笑む。

「この言葉を唱えるときは用心して、人生が変わるから。スーパーカリフラジリスティックエクスピアードーシャス！　って大きな声で言いながら、強おおく、ハッピー☆を感じるの。するとほんとにすごくハッピー☆なことが引き寄せられるのよ。見ているのと実際にするのは違うの、実際に、本当に、やってみて！」

わたしたちは、数分間、スーパーカリフラジリスティックエクスピアードーシャス、スーパーカリフラジリスティックエクスピアードーシャスと声をあげ続けた。心を込めて言うのと、ちょっと楽しいかも。笑いながら、上気した気持を落ち着ける。有理さんを眩しく見上げた。わたしの中に可愛らしいボールが入っていてぴょんぴょん飛び跳ねている心地がした。

「夢子さんは、以前と変わらず可愛らしいままね」

そう言われた瞬間、体内でぴょんと飛び跳ねていたボールが着地した。

変化だけは誰にでも訪れる。誰もが、変わらないことを怖れ、変わることも恐れ、変化したことを喜ぶ、変化できないことにストレスを感じる、わたしたちは変化に翻弄される。変化できる人だけが生き残れると誰かが言っていた。生き残るなんて、がつがつと抗っ

てるみたい。そうだ生きることは抗いなのだ。宇宙に拡散しないように抗うのが生きることなんだ。なんて考え事を、わたしはしていた。

「お庭をお見せしたいわ。お庭の見える居間でお茶にしましょう」
広い窓から庭が見渡せる部屋に招かれた。

大理石のテーブルに着くと、有理さんがお茶と焼き菓子を銀のトレイに乗せて運んで来た。

「とってもおいしいです。りんごがぎっくり入っていて。お茶も、とてもきれいな色です。このお茶は、ダージリンのファーストフラッシュに似てますね！くせがなくて飲みやすいから、オーガニックっぽい。茶園はどこですか、このお茶の葉」

わたしは、紅茶をきっかけになにか話を引き出せたらいいなと思った。

彼女は、紅茶を気に入ってくれて嬉しいわ、と言ってから言葉を続けた。

「んー、私ね、物知りなコトはあまり話せないの。紅茶のコトよく知らない。ただ味わうだけ。それに集中するの」

でも、微笑むこともして、紅茶の小さな缶をどこから出した。

「すごい。当たりよ。缶のラベルに書いてある。オーガニック。ダージリン。プッシュピン茶園の春摘みですって。これね、頂き物なの。銀行の口座を開いたときに送ってくださったの。私、贈り物でいっぱいの生活をしたってずっと思っていて、それが叶った今はとっても幸せなの。もちろん、銀行とかばかりじゃなくて、友達知人からの贈り物がたくさんあるわ」

贈り物ばかり置いてある部屋がある。

「わあ、夢みたい」

わたしは、上気した。かわいいものがいっぱい。

ディズニールランドみたいです、と言いきうようになったけどちよつと違うなと思ひ直し、言うのをやめた。さっきも、「わあ、夢みたい」と言ったのは正解か不正解か気になった。かすかにだけど、もう自

分の気持ちを言葉に出すのも不安になっていた??わたしがポケットに入れている言葉は、どれもどこかで聞いた物ばかりだ。「すなおにそう思っているのに」それを、言葉に出した途端、奪い去られる。言葉は、すべてそっとしておいて。??

まだ開封されていないものもたくさんあった。思い思いのラッピングがほどこされた贈り物の上には、あらゆる色のリボンがこぼれ、造花が咲き、オーナメントがキラキラ光っていた。

「ルビーのはめこんであるこのティアラはね、手品師のジョルジュ君が手品の途中で、帽子から出してプレゼントしてくれたの」

わたしはそれがイミテーションではないのを感じた。プラチナでできている。

「タメイキです。いいなあ。すてき」

触らせてくれただけでなく、鏡の前でそっとわたしの頭の上に戴せて見せてくれた。

「こちらのオブジェはね、とっても可愛いでしょう? チェンバロ奏者の春日ミッコさんが、ホールに隣接されてるミュージアムのシヨップで買って来てくださったの」

拳くらいの大きさのガラス玉がごろんと、十ほども、飾り棚に入っている。表面にカットが施された蝶々や花、果物から、透明感のある甘い色の光が零れ落ちる。赤い果物は火花を散らし、緑や青、紫やだいたい色の果物からは虹が立ちこめている。葉っぱはみんな金や銀でできている。アラビアンナイトを思い出した。外套が壁に触れると死んでしまう部屋にあるダイヤモンドやルビー、サファイア、エメラルドの果物畠??

「とてもきれい」

果物に釘付けになった。

「手に取ってみて」

私を見て有理さんが勧めてくれた。

「……これ、ちょっと手に取るのはイヤ、です」

「どうして。『気』だったら『浄化』してあるわよ。ミッコさんが

添えてくれたハーブでいぶしたし、月明かりにもさらしたし、天然塩も一昼夜まぶしたし、たまには水晶の上で休ませているわ」

「その理由じゃないんです。子供の頃に読んだ物語、あ、アラビアンナイトの物語です、御伽話にこういうの出て来て……魔法にかかりそうだからです」

アラジンは、魔法のランプを掴み、帰りがけに果物をとって部屋を出ようとするが閉じ込められる。でも、お守りの指輪に助けられて部屋から出る。部屋に閉じ込めたのも指輪をくれたのも同じ魔法使いだ。

有理さんはにっこりして頷いた。

「そうだわ、ミッコさん、フルータリアンなの。木から自然に落ちた果物だけを食べるのがフルータリアン。やがては何も食べずに生きる『ブレサリアン』になるのが理想だって言ってた。そしてこっちはね、ちょっとこっちに来てくださる」

わたしは有理さんに従った。

ブランドのバッグや靴、帽子の箱の前を通り過ぎ、また、ネックレスや指輪があふれている木箱、時計の入ったガラスケース、金貨の入った袋、そして、短剣、鎧、王冠、などのアンティークやレプリカを通り過ぎて、本棚の前で立ち止まった。

「これは、アンソニーから貰った写真」

サンフランシスコ在住のピアニストで、彼はエスパーなの。と言う。

写真は、滑らかな木のフレームに入れている。フレームは、白い羽の敷き詰められた箱に入っていて、その上から透明セロハンで包んであり、写真が見えるように華奢な金色のリボンがかかっている。

「念写なの」

ストーンヘンジを背景にドレスを着た有理さんが写っていて、その周りにピンク色のチュチュ風の服を着た妖精たちが蝶々みたいに舞うのが写っている。

「わばはは」

わたしはたやすく笑った。すぐ笑いやめられた。

「念写なんて、なしでしょ」

「ふむ。それなら、そうよ」

有理さんは箱を両手で包み込むようにしてから胸に押し当て、目を閉じて微笑んだあと、顔をあげた。

「フォトショップで加工した写真だってアンソニーも言ってた。そんな写真を念写だとも言いながらくれた、理由はあるのよ。でも、話すと長くなる種類の話だし、ほかの誰にとっても大した話でもないの。そして、少なくともわたしにとってはハートに忍ばせておくための、好きなひとからの贈り物よ」

機嫌良さそうにそう言って写真に接吻をするしぐさを見ると、元の場所に戻した。

その部屋を出るときに、わたしは、ガラスの果物に触る気になっていた。が、わざわざ頼むことは、実際にはしなかった。手に取りたい気持ちがある。実際には手に取らないでいる。

「お家の外観も撮影していいですか」

わたしは、庭や外壁の傍らで有理さんを撮影した。

「この近くにね、在原砂緒の家があるの。わたし、大好きなの」

有理さんは、腕を延ばして空を指し、柔らかに指先を下ろして、近くの家の屋根をいくつか越えた向こうを示した。

見晴らしの良いところだ。空をみわたすと、天使の羽の形をした雲がドラマティックに浮んでいた。だが……。

「大好き……。」

わたしは、そう言った。わたしも好きだ。わたしが好きだ。好きなのだろうか？ もうずっと前にほぼ全作品読んで、資料も集め、関連書籍も手当たり次第に見た。ネットで見つけた映像も見た。「YouTube」でインタビューやニュース、自ら監督・出演した『山を抜く』の一部も見たし、主演映画『ミストラル男爵』の予告編も見た。それから昭和四五年十一月二七日と二八日の新聞記事も

図書館でマイクロフィルム化されているのを探して、コピーした。写真集『棘のある花』だって持っている。こんな風に並べても彼を知っていることにはならないけれど、わたしにとっては大切な思いだ。きつとわたしは愛している。誰よりも？ 少なくともこの女よりも！

「偶然、この家が売りに出されていて気に入ったの。憧れの作家の家の傍に住めるなんて夢みたい」

なんだか腹が立って来た。怒ってもしょうがない。こんな女に嫉妬することはないけれど、他人から見れば、そしてこの女からすれば、わたしが不快を露にすれば、嫉妬ということになるのだと思う。げんちを取られれば、そんな決めつけだ、なんて言うこともできない

でも、どうしてこんな女が、よりによって、わたしの好きな作家の家の傍に住むんだろう。神さま、どうして？

「神さま、どうして」

わたしは、意地悪になった。

「あら。エキサイトするのは待って。夢子さんの気持ち、当てさせて」

この女はわたしを見つめた。

「怖れの感情？」

「そんなわけないでしょ」

怒り。疳の虫。癩。

「いいえ。怖れよ」

「あなたごときに」

キレイやすい自分、発見。こんなにキレイかったっけ……？

「神さま、どうして」

わたしはもう一度、言った。

この女は、両手をぎゅっと合わせて、深く頷いた。

「神は、善悪の判断がないのよ」

あ、とわたしは声を小さく出してしまった。

「この世では、私が思うにはだけど、神は、ノリよ。神は誰にでも味方するし、試練を与えるの。思い当たるでしょう？」

この女は、そもそも神はいない、という話にはしそうにない。

「だって、鹿蹄山ホワイランド事件って、あったでしょう。何も全然悪いことをしていない女の子が『手裏剣』で殺されてしまった……。すごく気の毒だわ。私、今度、雑誌にこの事件のことコメントすることになって資料を見るの」

わたしはきゅと小さく叫んだ。

「鹿蹄。資料って『談話室キタムラ』ですか」
「なあにそれ」

違った。見ている資料は有理さんのものと一致しなかった。

冷静になってみると、談話室キタムラで話題になっているのは『ホワイランド事件』ではない。

わたしは、れい君の手紙の住所を検索していて、そういうサイトがあったと、有理さんに話した。

「わあ、ありがとう。参考になるわ」

有理さんは、わたしに向けて腕を延ばした。握手。

わたしはまたひとの手の感触に吃驚した。

帰り道で迷った。住宅ばかりの風景で、タクシーが見つからない。あちらこちらに文士の家があった場所を示す案内板があるのを頼りに歩いていたら、日が落ちて夜になった。サンダル紐が食い込み、足の親指のつけね当たりに水ぶくれができた。三カ所、蚊にやられた。今年はじめに蚊にやられた。かゆい！ かゆい上に、サンダル紐の水ぶくれを攻撃する（ビビビ！）。水ぶくれがつぶれた。右足だ。左足も水ぶくれが出来ている。

「わーん」

わたしは泣きながら、フランケンシュタインになって夜道を歩き続けた。木々の茂る道の傍に、並木のある路地があった。通り抜けると、路地よりずっと広い坂道に出た。タクシーを探しがてら降りて行くと、国道に出た。

「オケシヨウ」

甲高い早口で叫ぶ男児が、一步一步、踏み出す度に大きく左や右に傾く格好になりながら歩いて来た。その子は、膝を折り曲げ、手を振り出して毎歩ごとに左や右に身体を曲げて歩く。ひたむきに歩いているように見える。歩くのにひたむきにならざるを得ないように見える。そういえば、わたしだってふざけて歩いているわけではない。むしろ、わたしこそひたむきにフランケンだ。道は譲らぬ。対峙するんだ。でも、男児は一步ずつ近づき続け、速度を変えず、少し横にそれて、すれ違って行った。わたしは、勝手に小さい勝負を挑んでいる間に、彼に道を少し譲られていた。

「ウーロンチャ」と叫ぶのが聞こえた。後はもう遠ざかっていて聞き取れなかった。

近くに図書館が中にある大きな公民館がある。地図のパネルがあったので見ると、先に大森駅があるのが分かった。商店街を通って駅まで歩いた。途中でたまたま通りがかった、流行ってそうなベーカーリーでパンを買い、食べながら歩いた。

「フンガー！（やっと自宅に着いたわ！）」、いそいそとカードキーを差し込んでドアを引くとすぐに、「ゴゴーン！」とドアがぶつかって止まった。内側からドアガードがかかっている。

「そんな貰ってるの？ いいじゃん。……そんなに毎日、接待あるのか。……うーん、確かに、俺は接待はないけどさ。……ああ、それくらいはね、貰ってる」

喋りながらジュンくんがドアガードを外しているのが見える。ドアを開くと、携帯電話を耳に当てたままわたしの目を見る。

喋りながらリビングに戻る。ワイシャツとスーツのズボン姿だ。ネクタイは緩めてあるけど外していない。

「……英会話の研修がある。あと今度、国内だけど、大学の留学制度に申請しようと思っている。経費の節約で、地元の大学しか選べなくなりそう。トウーダイは、先生が途中で変わるって言った。地元だと同じ先生につける……ええ、夏にそんな貰えるの？

ガイシいいねえ。……うん、不安は少ないけどね。でも及川、お前いいなあ。……先輩断れないのか。だったら、風俗なんか行くのやめりゃいいじゃん。俺？ そんなの行かねーよ。巨乳？ また巨乳かよ。ところで、巨乳の彼女とどうなんだよ。別れた？ ふられたの？ またかよ」

わたしは手を洗ってうがいをし、パソコンを起動させた。
アッサムでミルクティーを二つ作ってテーブルに置く。

ブックマークから『談話室キタムラ』を選んで開く。

「この前、イムちゃんに会ってきたよ。清貧ですよく助手はってまた言ってたよ。……うん。ジャックインザボックスの跡地で一緒に飯食ってきた。教会を模した内装の定食屋になって、火で炙ったバナナとか食って来たよ。まあまあだったけど。他のひとはいなかった。後藤さんも。丹波先生も元気……忙しそうだった。ヤマダ君と飲んで来たの？ ヤマダ君、そんな出張してるの？ 大変だなあ。残業すごいだろ。寝てる暇あるのかね。……年上女性と？ まじで？ 川端、まだレンアイはヒョウタイコウカだとか絶対シヨジョでないといやだとか、言ってる？ 言ってた？ 川端君はフロムの『愛するということ』を読んで欲しいですね、って先生が言ってたよ」
電話に出て来る名前は、ジュンくんから聞いて知っていた。

及川は、ジュンくんの大学院時代からの友人だ。他大から院試を受験してジュンくんと同じ研究室になった。女のコは胸があればいい、と言っていた。イムちゃんは、ロシア法の研究をしている。大学の卒業式で表彰され、助手として大学に残った。ジュンくんは彼の家に泊まりに行ったこともある。後藤さんは博士課程の先輩、ヤマダ君は農林水産省にいる。川端は、一つ下の後輩。先生？ 丹波教授は、研究室の先生で、妻はキリスト教徒なのだそう。小学生と中学生の娘さんがいて、携帯電話を買ってくれと言われるようになったそう。

ジャックインザボックスというのはパスタ店で、ジュンくんが大学院生だったときに、たまにランチしに行った。一度だけ、電話に

登場したひとびとが勢揃いしていたことがある。ジュンくんにゼミ合宿の写真を見せてもらったことがあるから、すぐ分かった。それぞれのひとを、思ったより大きく感じたり小さく感じたりした。ジュンくんと及川が一時的に席を代わったので、及川とだけ話をしたことがある。あたりさわりなく、ジュンくんのうわさ話をしただけだ。

ジュンくんの電話での話し声が続く傍らで、わたしは『談話室キタムラ』の続きを探す。(第三章に続く)というところまで読んだのだった。

十第三章十

遊園地跡 アインの撮影した画像。

あいき&アインのサイトはここ。

続きはなかった。だけど、「あいき&アインのサイトはここ」の「ここ」をクリックした。

セフィロトの樹

「ホワイトランド」

超フェーマスな心霊スポット〇〇県鎧井群青葉市の「鹿蹄山ホワイトランド」を偵察・探検してきたレポートです。

（気に入ってくれた人はweb拍手ボタンを押してくれるとうれしいです。）

ホワイトランド（略して白ラン）とは

一九七二年に開園し、八七年に閉園した遊園地です。開園当時は県内最大規模で知られていましたが、老朽化その他で閉鎖。施設や遊具の多くが残ったまま廃墟化しています。

☆CONTENTS☆

- ・サイト管理人について
- ・レポート
- ・画像

・参考資料……鹿蹄山中2少女殺害事件

少女の残した詩『割愛された楽曲』

☆メールはこちら

☆メッセンジャー（オンラインのときは緑色に点灯してます。メッセどうぞ）

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

サイト管理人について（読みたい人だけね）

アイン・ソフ・オウル

カナダで生まれ小学五年生まで海外で過ごしやした。日本語も英語もちよつとカタコトになることがあるみたいです（汗）、よろしくお願ひしますぜい。趣味は、アルティミット（チームでプレイ

するフリスビー)です。

レポート

四月二日

ランデブーポイントは鹿蹄駅前の喫茶店「モンパルナス」。

九時過ぎに、あいき君と落ち合った。

「鹿蹄？ミラノ南池」間を走るバスで鹿蹄山に行く。ミラノ南池とは海側にある巨大ショッピングモールで、『皆行け、みないけ♪ミラノ南池どすえ』と芸者が三味線を奏でながらネコの着ぐるみに飛び蹴りするCMでおなじみだ。

「鹿蹄山ハイキングコース」を経て「ホワイトランド」で降車。降りる人は俺等の他には誰もいない。

霧が少し出ている。

舗装された山道をあいき君と歩いていると、山菜を採っている家族に遭遇。めっちゃめっちゃ可愛い女兒がワンピースで道端に座り込んでいる。採った山菜を花束みたくして小さな手に持たされ、首を傾げて俺等に愛嬌振りまく。誰でもこんな子見たら、とろーんとなつてしまいそうなメルヘンさだ。父母はどちらも巨漢、金髪、スウェット、金ネックレス、っっかけだった。

そこを通り過ぎて先に進む。遊園地に続く道と国道が分岐したあたりから歩いているので、『キタムラ』でマドレーヌ貴婦人氏が書き込んだ「謎の公園」を探す。草の伸びきった空き地の中に滑り台だけの公園があるのかないとか。

「あるわけないよねえ」

「こんな辺鄙なとこ誰も来るわけないもんなあ」

俺とあいき君は笑いながら公園探しはそこそこに白ランに急ぐ。

……あつた！

戦慄。公園、まじである！この分だと謎の村もあるのでは？

俺もあいき君も無口になって、叢の外から空き地に目を凝らす。薄霧の中に滑り台の影が見える。元の色が分らないくらい錆びてペラペラに塗料が剥げ落ち赤褐色に侵蝕した鉄の塊？？梯子と滑走台の形は残っている？？が見える。遊具として使っている人がいるとは思えない。

空き地の中に、低いフェンスで四角く囲ってあり、その中に滑り台が設置されている。一面、草ぼうぼうの上に地面は小石だらけの赤土で、人が踏み入った気配はない。

「ナンジャコリヤー！ この公園、だから何なのっ！ うわあー！」
ナンセンスな公園の存在に耐えられなくなったあいき君が叫び、走り出した。

「待って、待ってー！」
走って追いかける俺……。

いつどのような目的で誰がこの公園を作ったのか手がかりを得られないまま我々は公園を後にした（写真を何枚か撮って来たので見てください）。

※この公園について何かご存知の方からの情報お待ちしています！

遊園地のゲートが見えて来た。

ゲートに積んであるガラクタの横をすり抜けて中に入る。

まずは、ジェットコースターの乗り場に行く（写真五）。

星の飾りが外れかけ、錆びた赤いコースターが結構かわいい。

山を利用してレールが敷いてある。少しレール沿いに山を登って見下ろしてみると、霧が深くなり、真っ白な世界にレールの行き先が突入していく。まるで異界に降りて行く梯子のようだ。反対側を見上げると真っ青な空に駆け上がる天国への階段？？

傍には、カラフルでポップな観覧車が空に映える。

次に我々は、ゴーカートの跡地に行った。転倒したまま放置されているゴーカートの残骸。かつて子供を乗せてのそのそ歩いていたパンダのライドもなぜか一緒に横倒しになっている。ゴーカートのコースにあったトンネルの中を通ってみると、穢らわしい落書きでいっぱいだった。

鎖のぶらさがった塔だけが残っている空中ブランコを通り過ぎてゲーセンに行く。ゲーセンの中にはステージのような台があり、ここでショーなどやっていた様子。パーティーグッズとかにある、髭と鼻のついた黒ぶち眼鏡が落ちている。拾って俺はそれをかけ、その辺にあったライドのバックミラーに顔を映してみる。ワハハハ。あほくさ。俺は何をそんなに笑ってるんだ。冷静になって眼鏡を捨てようとする、あいき君も眼鏡をかけて映しに行き、すげー笑ってくだらないと言ひ眼鏡を元の場所に置いた。かけているところを見せてと言ったが、見せてくれなかった。

ここも、フトドキ者が荒らし放題だ。壁を落書きで汚し、ゲーム台や窓を割る。ガラスの破片に気をつけながら外に出る。

外には顔の部分だけくり抜いたパネルが置いてあった。ウルトラマン一家が勢揃いで、俺もあいき君もゾフィーで記念撮影した。何となく。

そこを通り過ぎると芝生の広場と売店があった。焼きそばやラーメン、ホットドッグなどを売っていたようだ。「やきそば」と書いた旗が破られて落ちている。店の外に木のテーブルと切り株の椅子がある。

「きゃっほい！ イエイッ！ 子供の頃、こういうところに家族で来たなー。懐かしい。あたし、チョコレートサンデーとかねだって食ってた」

あいき君が椅子の上に飛び乗る。さらにはテーブルの上によじ上る。

「いいなー。俺、そんなの買って貰ったことない。こういうところ来ても、かならず持参した弁当広げるの。あいき君のうち、ブルジョ

ワ？」

俺は切り株を手で払ってから腰掛けた。テーブルの上に立って見下ろしたあいき君は髪型のせいか逆光でウルトラの母に見えた。頷いて言う。

「あたしの家？ 『アップパーミドル』」

ジュンくんは携帯から家の電話にかえて及川と話していた。

「俺、買っちゃったよー。家だよ。とうとう買っちゃいましたよ。ありがとう！ オイカワさん。……言うわけないじゃん職場の人になんて。言えないよ。職場で家買ったなんて言ったら、あれこれウワサされるもん。……うん、久しぶりに飲もうよ。いつだったらいい？ 来週はちよつと。今週？ 日曜？ うん、日曜ね。そいじゃ」

受話器を置くと、ジュンくんはネクタイを外し始めた。

「及川と飲んで来るから、日曜は多分、食事いらなと思う」
わたしは返事をして、ハンガーを出した。

「アップパーミドルって何？」

「ねえよ、そんなの。ゆっちゃん、ハンガー、ありがと」

「『中流階級』以上ってこと指して言ったりしない？」

「マーケティング用語？ 社会学？ 翻訳本から？ 誰の著書に載っていたの」

「ネットに書いてあった」

「なんだ。階級ごっこなんて、君の気にすることじゃないよ。それより、ご飯の準備はできてるの？ ……してないじゃん。ゆっちゃん、君ねえ！ しょうがない。寿司でも食べいくか」

ジュンくんとわたしは、ときおり行く回転寿司店で食事した。結構おいしい。

帰って来て、パソコンの前に座る。アインとあいきがどうしているのか気になる。

「君ねえ、一日中パソコン見てんじゃん。休みなよ」

「そうなんだ」

売店を後にし、いよいよオバケ屋敷に向かった（写真六）。

入ってすぐに隠し扉に突き当たった（写真七）。

一旦外に出る。オバケ屋敷を外からぐるっとまわると、壁が壊されていて、中に入れる穴がいくつか開いていた。覗いて見ると、奥の方は当時のまま残っている（写真八）。

「ここ、心霊スポットなんだよね」と、俺が言うと、あいき君から衝撃の事実が知らされた。

「てゆうか手裏剣で殺された事件があった場所だよ。超コエエ！」
手裏剣??

「しゅるけんって何。俺、たまに知らない日本語の単語があるの」

「しゅりけん」

「何それ」

「刃物かな。四つツノがついていて、尖ってる」

俺は、尖った角が四つあるものを思い浮かべた。

「それは金属で出来ているよね？」

「鉄だよ。黒い」

「何を切るもの？」

「人だったり、物だったり。切るというより、投げて当てたり、刺したりする飛び道具」

「角のついたボールみたいなもの？」

「ひらべったいよ」

「刃が四本のナイフっぽいもの？」

「近づいた。むりやり正解にしてもいい。こういう形」

空中に指で描く。軽く、指揮者だ。

「なるほど。思ったより大きいね。frisbeeくらいある。鉄板だったら重たいから両手で投げるのかな」

「もっとチツチャイ。掌に乗る。形を説明するのに大きく描いたの。両手をスライドさせてしゅしゅって飛ばしたり、エイッて片手で投げたり」

「なるほど。なんとなく分かったぞ。ありがとう、あいき君」

後日、『凶器の手裏剣レプリカと同形のもの』として雑誌に載っていた写真を見ると、四つの角はなく、掌に乗る大きさではなく、両手でスライドさせて飛ばすこともない、鉛筆に似た黒い金属棒が写っていた。

壁の崩れたところから入ってみます（写真九）。さっき行き止まりになった隠し扉のちょうど裏側から来たことになります。

オバケ屋敷の中の様子は、写真の通りです（写真一〇～一五）。ここで詳しく書くより写真を見てもらったほうが早いと思うので、見たい人は写真を見てください。

俺たちが部屋に入ったときのことを少し伝えと、こんな会話をしました↑。

「なにこの紙束。いっぱいクシャクシャの新聞が落ちてる。邪魔？ あいき君が床に落ちている紙束を蹴散らす。

「いやあああああ！ 新聞、中に菊の花が入ってる！」

乾涸びた花や榊が散らばった。叫ぶ。

「きしよおおおい！」

「お供え蹴っておいてきしよいはないと思う……」

俺は彼女が落ち着くよう肩に手を当てた。

「あ……。オバケの皆さん、お供え蹴ってしまったて、許してください。阿毘羅咩欠蘇婆訶 阿毘羅咩欠蘇婆訶」

「呪文？」

「御真言。これ言うて霊に取り憑かれないうて」

「じゃあ、俺も。あび、……南無阿弥陀仏でいいや。意味は知らないけど」

成仏してください。

俺は手を合わせるために、両手を顔の前くらいの高さに持つて行く。すると上着の袖が少し長くて手が隠れそうだったので、引っ張りあげたくなった。片方ずつ肘のあたりをつまんでずりあげる。微かにもどかしい。改めて両手を合わせる。すると、殺されたのはどのようなコだったかという考えが起きた。

「???樂園に。あめん(Amen)」

俺は粉々になった菊と櫛を、少しだけ、小さな一箇所寄せ、あめん。ともう一度言った。言わないと気が済まなかった。オバケなんて言って、ごめん。うまく洒落でまとまった。

・参考資料……鹿蹄山中2少女殺害事件

関連記事

『レビュー・オン・ザ・ウェブ???川村喜八の個人サイト』より引用

好川夢子は

瞬間、さむいぼができた。わたしは、突然現れた自分の名前に吃驚した。

好川夢子はデビュー当時から全三冊の単行本すべてに自殺願望のある主人公を描いた作家であったが、単行本にならなかった『2人の少女におっさん光線』という作品以降は他殺を描くようになる。

『2人の???』は、岸田楡のまんが作品『少女ドグマチール』の盗

作ではないかとの指摘がネットの掲示板で話題になったことが発端となり、作品を発表した文芸誌『月刊デカダン』が謝罪文を掲載するに至るのだが、

同名ではなくて、ほんとに己のことが書いてある。手が汗を帯び、震えた。

玄関のあたりで声がする。

「君に手紙が来ている」

近づいて来る足音や衣擦れの音を頼りに振り向かずに受け取ろうとしかけたけれど難しく、結局、振り返ってジュンくんを探した。届きそうで届かないところまで手を伸ばしてくれていた。わたしも手を伸ばして、空中で受け取る。

「クライアントからだ」

返事を求めないけど聞いて欲しかったくらいの声の調子で独り言を言った。

そっけない茶封筒には何か小さな筒状の物が入っている様子の厚み。

開けてみると、眼科の机の上に並んでいるスポイドでフタをした遮光ガラスに似た容器が入っている。濃紺のボトルで、ラベルには植物の絵が書いてある。同封のメモを開いてみると、

「追加商品です。これも試してみて、レポートを書いてください。使い方は、飲み物に二滴たらすか、舌の上に直接二滴たらしってください。ただし、今回同封した『レスキュー』は、四滴たらしってください。

『レスキュー』……バッチ博士が、チェリープラム、クレマチス、インパチエンス、ロックローズ、スターオブベツレヘム、の五つのフラワーレメディを組み合わせで作りました。

取り乱しそうな感じのとき、気が遠くなりそうな感じのとき、シ

ヨックを取り除きたい感じのとき、不安な感じのとき、その他シヨックを感じるときに、使うと、気持ちのバランスを取り戻す感じになります。ストレスを感じるときはいつでも使用してみてください。」

と書いてある。

今、まさに取り乱している。

わたしは開封して、スポイドで四滴、口にたらした。こんな効くわけではないじゃん、と思いながら。

いつの間に入ったのか、お風呂からシャワーを止める音が聞こえて来た。

摺ガラスのドアが開く音がした。バスタオルを巻き付け機嫌良く歌いながら部屋に入ってくる。

「俺ね、もう残業ばかりで疲れた。寝付きが悪いんだよ、最近」

そう言ってリモコンでテレビをつけ、スポーツのニュースに目を凝らす。

「これ試してみる」

「何なのそれ」

振り返らずに返事した。

「気持ちが落ち着くって。口を開けて」

ジュンくんが躊躇わず口を開けた。わたしがそこに四滴入れた。

「アルコールだよ」

不服そうにジュンくんが言った。テレビから目線を外してTシャツを着、ジャージを穿いている。再びリモコンを手にとってテレビに目を凝らす。

「保存用にブランデーが入ってる」

テレビを消して歩き出した。

「だったらブランデーじゃん」

髪を乾かすドライヤーの音がする。

「水とブランデーだって。ほかに『物質』は何も入ってない」

ドライヤーを止める。歯を磨く音がし始め、やがて終わる。

「あら、そう。何なのそれ。ま、いいや。俺、明日も早いから、寝る。君もパソコンかたして。あとそのラジオみたいな箱なんなの。手紙も。それもかたして早く寝て」

がー。寝息が聞こえた。

早。寝付けて良かったけど。肉体も疲れていたのだと思う。ラジオみたいな箱とは「願望の箱」のことだ。わたしは「願望の箱」をゆうパックスの箱に戻した。手紙とは、れい君からの手紙のことだ。手紙も「願望の箱」と一緒にゆうパックスの箱に入れる。

部屋のライトを消す。後もおわたしはさっきの続きを読みたくてパソコンの青白い光の前に座った。

好川夢子はデビュー当時から全三冊の単行本すべてに自殺願望のある主人公を描いた作家であったが、単行本にならなかった『2人の少女におっさん光線』という作品以降は他殺を描くようになる。

『2人の???』は、岸田楢のまんが作品『少女ドグマチール』の盗作ではないかとの指摘がネットの掲示板で話題になったことが発端となり、作品を発表した文芸誌『月刊デカダン』が謝罪文を掲載するに至るのだが、ここでは盗作問題はひとまずおいておく。好川が他殺を描くようになったことに注目したい。

ここで思い出すのは鹿蹄山で少女が殺害された事件である???当時十三歳だった少女が家庭教師の少女（当時一九歳）に鋭利な手裏剣で首を切られ息を引き取る。身ごもっていたが胎児も助からなかった。

被害少女は生まれつき声がほとんど出ないことを苦にして学校に通わず、普段は母親と二人で自宅にすることが多かった。クラシックバレエを習っていたが、半年前に股関節を痛めてやめてしまう。バレエを辞めてから行動が乱暴になり、窓ガラスを割ったり、近づく者にバックドロップをかけたがったりするようになったという。

ひんばんにリストカットするようになったので、母親が少女を心理相談所に通わせ、また、話し相手も兼ねて家庭教師をするよう被害少女に頼んだ。被害少女は母親に同情し、被害少女を諭すことがたびたびあったという。事件当日は少女ふたりで映画を観に出かける予定だったが、被害少女が急に遊園地跡を見たがったため遊園地跡に向かう。遊園地に着き、ほどなくして被害少女は殺害される。被害少女は、被害少女を殺害した後、山を降りる途中で一一九番に通報した。

被害少女は明るい性格で友達が多かったという。被害少女の母を自分の母親のように心配していたという。正義感が強く、「被害少女の母が悩んで摂食障害に陥って行くのを見て、思い詰めたのではないか」と被害少女の知人が言っている(ウェブ〇〇新聞)。

『2人の??』では、少女作家として売り出された主人公の葛藤が描かれている。少女としての「賞味期限」を恐れる主人公ナツメが、都庁に入庁するのを夢見る少女クロエ、そして、おっさんと出会う(おっさんは同級生・寛路のニックネーム。自分のことを『小生』と言うところに由来)。以下、一部を引用する。

「わたしはゼロよ。ゼロは無だし空っぽだし、それゆえに永遠。ほら、ナンセンスなふるまいはいかが」

ナツメはスタッキング・チェアの上で立ってスカートを捲り、ランジェリーが見えそうなぎりぎりまで裾を引っ張り上げて太ももを露にした。「おっさん」が凝視する。

「はー！ おっさん、目線がキモイよ」

クロエがおっさんを蹴飛ばす。

「クロエ、『寛路くん』を乱暴に扱わないで。わたし寛路くん好きよ」

「ナツメさん。小生、変態ですよ。もっと強くしてくださいクロエ」
おっさんがナツメの太ももに抱きつく。スカートをめくって捲り、ナツメの体温を発散するパンティのなだらかな丘に顔を埋め、舌で

味わおうとした。クロエがおっさんにパンチ。

「キャー。きつしょ。おっさん！」

「もっと言ってくれ……『きんもー』とか『変態、マジウケる』みたいな言葉がいい」

「マジウケる」

「優しすぎ！ 迫力がない！ 『おやじ死ね！』とか言ってくれ」
クロエが泣き出した。

「そんな酷いコト。やっぱ、ひとに向かって言えない……」

「泣きや済むと思ってんのかこのこむすめ。死ねよ」

おっさんがクロエの頭を両手で押さえつけて耳を噛む。

「キャーキャーキャー」

泣き叫ぶクロエの声は、外に広がる街の喧噪に掻き消された。
「寛路くん」

スタッキング・チェアから飛び下り「暴力はなにも生まない」と言いながらナツメが、おっさん寛路をレバーブロー。うずくまった。
「クロエは数字のイチよ。イチはものごとの始まり。イチが照らすとわたしもイチになり、互いに照らし合う。それを見たおっさんはサンよ。サンが来てわたしたちはニと呼ばれる。ニを見たひとはサンになる。あなたが来るとわたしはゼロではなくなるの。それは変化することだし怖くて耐えられないわ」

それを受け、クロエは涙を拭きながら掠れた声を絞り出した。

「サンはイチでも二でもゼロでもあるでしょう？ わたしたちは1や2や3をぐるぐるまわると同時に0でもあるわ。みんな仲良くすればいいじゃない」

洋服にブラシをかけながらおっさんが立ち上がる。

「そういうのは理想の国にしかないんだよ。ジョン・レノンじゃあるまいし」

「おっさん、夏合宿でイマジンを弾き語りしてたじゃんよ。わたし、それを見て勇気づけられたんだからね」

ナツメも立ち上がる。

「それはそれさ。小生の表現活動はそんなものさ。そのものがフィクションさ。ナツメさん、君だって作られた美少女作家に過ぎないんだ。つかの間の手慰みが君さ」

「違う、ぜったいそんなことない。寛路くんにはゼロが分からないのよ」

ナツメはいきなりおっさんにキスした。

おっさんは「きゃ！」と叫んでよろけ、よろけた勢いで窓辺に辿り着くと、窓を開けて通行人に叫んだ。

「みなさん、この人、変態ですよ！」

直後、おっさんが壁沿いに弧を描いて倒れる。

手裏剣が首に刺さっていた。クロエが投げたのだ。静寂。やがて「寛路くん」と言って泣くナツメの声が、かぼそく空間に紛れ込んできた。

好川夢子

（『2人の少女におっさん光線』

ここでナツメが対峙するのは世間Ⅱおっさん、である。おっさんは、ナツメを予備校に誘う。おっさんの友人でありナツメに紹介したクロエは、世間に通じる入り口として登場するのだ。

鹿蹄山の少女に重ねて見る。孤独をかかえた被害少女はナツメでありゼロである。クロエは母親。おっさんは、殺害少女だ。しかしそれではおっさんがナツメを殺害したことになってしまう。ここにこの事件の本質が浮き上がるのだ。好川の小説では、クロエがナツメと手をつないでおっさんが息をしなくなるまで見守るところで終わっている。鹿蹄山では、被害少女ナツメは、家の外の世界（Ⅱ殺害少女Ⅱおっさん）に抹殺されてしまうのである。殺害少女を娘に引き合わせた母親クロエは娘を心配して、少しでも気が晴れるようにと、洋服を買い与えたり、娘が望むままにお使いをしたりしていたという。母親に同情するうちに共依存関係となった殺害少女は、母クロエの代弁者として、ナツメを殺してしまう。つまりクロエは、

3ではなく0を殺してしまったのだ。それはクロエ自身の死でもある。

わたしは、なによりも、なによりも（2度目）、ナツメが被害少女に例えられたことを気に入らなかった。どうして殺されなくてはならないのか。ぶんすか。でも、サイト制作者、朧な距離間で知らない人、に、わざわざ言うほどでもないとして、つまり、なにも言えない。スーパーカリフラジリスティックエクスピアリドーシャス……。

関連記事2

『声なき少女の悲鳴？鹿蹄山中2殺害事件ルポタージュ（週刊ゾフィ）』より引用

これまで語られて来た鹿蹄山事件は、被害者である広尾一花さん（当時一三歳）の母・カトリィヌさんの苦悩に同情する論調の記事ばかりであった。

僕は疑問に思い続けた。生まれつき声が殆ど出なかったという「いっか（一花）」の死が、僕には不憫でならない。

いっかが殺害される瞬間が映っている映像がどこから流出し、ネットにアップされている。URL……http://☆○●☆kθε（閲覧したことによる精神的打撃に注意）。

この映像は、映像を撮るのが趣味だったという、いっかのカバンの中に入っていたカメラがとらえていた。まったくの偶然なのか、それともいっかが危険を察知して操作したのか、作動していて、持ち主の最期を記録していた。

いっかが、加害少女の言いなりに動いている様子が映っている。

聴こえて来る音声は途中まですべて加害少女の声だ。「こっち」。

「座って」「わたしを殺そうとしたでしょ!」。いっかが何かを拾う。すぐ加害少女に手渡す。短い沈黙の後、いっかが、静寂を切り開こうとする。何を言っているのかは聞き取れないがまっすぐ加害少女を見て掠れた声を発する。声が止む。言われるまま壁を向く。いっかが。すぐにいっかは眠り人形のように瞼を下げ、加害少女に身を委ねて崩れ落ちた。この間、いっかは一度も加害少女に抵抗していない……。ただひとたび、まっすぐ見て喉の奥から絞り出すことばらしき音を発しただけだ。

映像はここで終わっていた。

いっかの体内に胎児がいることが、司法解剖により分かった。加害少女は、動機のようなものとして「遊園地跡を散歩していたら、筆談で一花さんが妊娠していると聞いた。またカトリイヌさんが苦しむと思い腹が立った。今後のことを話し合うため椅子に座らせるところ、一花さんが手裏剣を拾ったので不安になり、気がついたら殺害していた」と言っている。遺体の側に落ちていた筆談メモには「いっかの筆跡で「身体の関係を持ったひとにしか心を開けないみたい。」」「世界中がわたしを敵視している。」「死ぬ前にちゃんと生きたいの。」などと書かれていた。好きだった歌の詞だと思われる。いっかは、声帯を絞りきって声を発していた。それは言葉にはなっていない。けれど、なんとか伝えようとしていた。何度も映像を見直す。いっかが泣きじゃくっている。「……こ……い……ます……を……いえっ……かうえ……い」雑音に流れてしまっていてほとんど聞き取れない。いっかは、加害少女を見つめている。加害少女の殺意には気づいていたのだろうか。いっかが、子をかばって命を乞うていたのだとしたら?。「お腹に子があります??(泣き声)??この身を家に帰してください」僕には、いっかがそう言ってるように見えてしょうがなかった。加害少女は、声を振り絞るいっかを見ていながら、殺害したのだ。

関連記事3

『「重い」と暴れる娘に耐え忍んだ果てに（週刊カトレア）』より
引用／抜粋

??カトリイヌさんは暴れる一花さんに耐え続け、自身のことも省みず愛情を注ぎ続けたという。

先月の半ばあたりから一花さんは体重が増えたことを気にし出し、週一回通っていた心理相談室に行くのも嫌がるようになる。カトリイヌさんが新しい洋服を買い与えたところ、「似合わない」と一花さんが激しく動揺し、リストカットをする騒ぎを起こす。心配してカトリイヌさんが近づくと、「重い」と書いた紙片をいっぱいに投げつけられてしまう。カトリイヌさんはそれ以来、体型を気にしてほとんど食事をとらなくなってしまう。

「カトリイヌさんが日増しに痩せて行くのを見ているのがつらかった。毎日のように『娘を殺して私も死ぬ』とカトリイヌさんは言っていた」と、一花さんの家庭教師をしていた加害少女は言った。近所の人によると、「（カトリイヌさんが）いっかちゃんの話をするときはいつも涙ながらで可哀想だった。ガンマちゃん（家庭教師の愛称）」といるときは楽しそうで、よく二人でスーパーに食材を買いに行くのを見かけた。ガンマちゃんは笑顔で挨拶する元気な子で、いつもカトリイヌさんの荷物を持ってあげていた。『ガンマちゃんは本当に良い子だ』とカトリイヌさんはよく言っていた」。

少女の残した詩

『割愛された楽曲』 広尾一花 作

詩だ……。たっぷりある。いまは真夜中。早く寝なきや。じっくり読む？ それとも字面をちよつとだけ見る……。かな。

友人の母に会い 友人からたくされたLetterを渡さねばなりません

読むはしから崩れ落ち他の言葉同様に風化していきますことばひとつずつを

いまこの瞬間にとらえて下さい

善い馨りのする淡い色の便箋を開くと同時に

いまこの時捉えて下さい

若し然う出来なければ？？続きは後で、今は唯、読んで下さい。

揺らめき nano 光の波

滅菌済の鏡に僕はこの姿映して

幾度か 音のしない回転式拳銃 を引くふりをする

その度につく軽い傷は そう僕の掠れ声

声に憧憬 声に萎縮 声帯が刻む 肉体に刻む リング・ワンデリング

夜になって董色に沈む街を泳いで教会に辿り着く

畸形のparty 傍にいてと泣き叫ぶ甘美

見よう見まねでゴシックポエマの真似をする辿々しく君

『儚い』と書いて悪夢と読むのと君のくちびるからこぼれた破戒
微睡みは睡蓮

教会の外で 月はふたたび上り 陽とめぐらす

新しい陽が、ことばからはじまる

少女より遡る 君は サカナになって海に身を委ね または抗う

枯れた葉の中から羽根をひろってください。生きた葉でできた羽根を一对拾ってかくまってください。冷たく暖かい手の中から羽ばたかせてください

楽譜を添付します。この手紙を音楽に乗せることを切望します。追伸 僕は本当に幸せでした。どのひとも、もしその人自身が幸せであることを願えば、幸せだと思います。

??友人から預かったLetterに添付された楽譜は、幾重にか重ねた円からなる図形です。幾何学模様を描いた楽譜を、いま私個人の判断で割愛します。ここで楽譜を見せるより、詩がメロディに乗ってあなたが感受することが友人の望みに応えることだと思うのです。

字面も見だし、ウィンドウの上部にある「×」をクリックした。ウィンドウが瞬時に消え、見知らぬ少女の書いた詩も儚くという余韻もなくぱさつと消えた。そもそもれい君のことを知リたかったわけ。

閉じたウィンドウの下にはウィンドウがあった。クリックしたときに元のページが残っていて、その上に新しいウィンドウが開いていたのだろう。残っていたウィンドウには最初に見た☆CONTENTS☆と書いてあるページがあった。

☆CONTENTS☆

- ・ サイト管理人について
- ・ レポート

ークは、さっきまで灰色で死んだような顔をしていたのに、いまは上機嫌で緑色に点灯している。

アインがPCの前にいる。スマイルマークがアインに見えて来た。アインがスマイルのマスクをして現れたのを想像した。

「願望の箱」を再び取り出してダイヤルを回す。三回目には指が引っかかった。

顔マークをクリック。小さいウィンドウが飛び出した。

はじめまして。サイトを見ました。と、ID『AIN』に送信した。

ちよつと横を向いている隙にウィンドウの中で「『AIN』の発言」という文が増えていた。

『AIN』の発言 メロン、こんばんわ☆

こんばんは。「わ」より「は」と書きたい。

『Melon』の発言 こんばんわ。夢子と言います。

わたしのタイプした文字がエンターキーを押したらPCの中に出てくる。画面にわたしの発言が登場する。そして新しい発言が登場する度に、それより前の発言はどんどん下方に行く。

『AIN』の発言 夢子。僕はゆー。

『Melon』の発言 こんばんわ。ユメコと言います。

『AIN』の発言 メロン、こんばんわ☆

『Melon』の発言 はじめまして。サイトを見ました。

鹿蹄村に、友達が住んでいたの。手紙の住所が鹿蹄村になっていただけ、地図になくて。談話室キタムラで話題に挙っていた『地図にない村』のことかもしれない。何か知っていたら教えて欲しいんだけど。と伝えたい。

『Melon』の発言 ゆー、いきなりなんだけど

『AIN』の発言 ユメコ。僕はゆー。

『Melon』の発言 こんばんわ。ユメコと言います。

『AIN』の発言 メロン、こんばんわ☆

『Melon』の発言 はじめまして。サイトを見ました。

続きを入力している間に、ゆーの発言が出現した。

『AIN』の発言 んん？ キスでもする？ チュ？

『Melon』の発言 ゆー、いきなりなんだけど。

『AIN』の発言 ユメコ。僕はゆー。

『Melon』の発言 こんばんわ。ユメコと言います。

『AIN』の発言 メロン、こんばんわ☆

『Melon』の発言 はじめまして。サイトを見ました。

キス。それについては無表情で「笑」と入力する。

『Melon』の発言 笑。地図にない村のこと聞きたいです。

『AIN』の発言 んん？ キスでもする？ チュ？

『Melon』の発言 ゆー、いきなりなんだけど。

『AIN』の発言 ユメコ。僕はゆー。

『Melon』の発言 こんばんわ。ユメコと言います。

『AIN』の発言 メロン、こんばんわ☆

『Melon』の発言 はじめまして。サイトを見ました。

リロードボタンを押してみる。

『AIN』の発言 いいよ。きみ、マイク持ってる？ ちよくせつ、

話そうよ。

『Melon』の発言 笑。地図にない村のこと聞きたいです。

『AIN』の発言 んん？ キスでもする？ チュ？

『Melon』の発言 ゆー、いきなりなんだけど。

『AIN』の発言 ユメコ。僕はゆー。

『Melon』の発言 こんばんわ。ユメコと言います。

『AIN』の発言 メロン、こんばんわ☆

『Melon』の発言 はじめまして。サイトを見ました。

持っていたけどクローゼットの中に入っている。ジュンくんが寝てるから、物音を立てたくない。明日メッセして良いかアインに訊くといいよと言ったので、メッセンジャーを終えた。

「願望の箱」を出したままだ。

ダイヤルを回しながら思い浮かべる。

いつか。

母カトリイヌ。

家庭教師ガンマちゃん。

わたしの指をかけたダイヤルはどれにも引っかからなかった。

いつかのところで指がダイヤルに引っかかるかなーと思ったけど、すなおに認めると、なにも「願望の箱」に変化はなかった。

れい君。

引っかからない。

れい君。

引っかからない。

れい君。

引っかからない。

もう寝よう。何にもいまは引っかからないのだ。

アイン

引っかからない。

ゆー。

かすかに確実に引っかかった。そんなの気のせい、と言われたら、そうだと思う。こんな箱、「願望の箱」なんぞやっておしまいゆうパックの箱にしまつて、その上にれい君の手紙を乗せて、ゆうパックスのふたを閉じた。

バリエーションジャジメントだけは譲れない。

商品コピーの仕事のクライアントとのメールのやりとりがヒートアップしてきた。価値判断のやりとりだ。

フラワーレメディのことだ。昨日、寝る前に簡単に「ツレが簡単に寝入ったので不思議でした。『フラワーレメディ』の効果とは思いたくないのですが」とわたしがメールしておいたところ、返信が来ていた。

『科学的な根拠はないですが、効果はないことはないです』
クライアントは大学でバイオテクノロジーを学んだ延長で食品メ

カーの製品開発部で研究員をしている。科学と非科学的の区別はつけている。『「精神世界」「不思議グッズ」「氣」「オルタナ科学」には興味がある。でも、決して存在を科学的に証明したいわけではないです。逆です。おかしなデータで超常現象が存在するように見せかけているのを検証・分析する』のだとメールに書いてあった。私も非科学的な物を信用していない。それでもなぜか、話はかみ合っていなかった。

「でも、効果があるということはやはり科学的に説明できるということではないのですか」と私はメールに書いた。そうでなければ、ジュンくんがすぐ寝付けたことは、ただの偶然だ。

「もし俺がすぐ寝られたのがその何とかという物の効き目なんだったら、それはぜったい何か物質が入っているんだよ」

回転寿司に行った帰り道を、足早に歩く。早く帰らないと大学ラグビーのテレビ中継が始まる。ビデオの録画予約をしても、早く帰る。ジュンくんの冬の休日の楽しみなのだ。

「わたしも、そう思った。クライアントさんの説明では『薬理効果のある物質は入っていない、物質も水とアルコールだけで、それ以外に入っているとしたら物質とは違うものだ』と言うの。花の『エネルギー』を水に写し取ってるんだって。効き目に科学的な根拠はない、とクライアントは言ってた。唯、『科学的に存在しないけど、効き目はないことはない』って」

全部、メールのやりとりで聞いた。

「気のせいだろ」

「うん、たぶん。プラシーボ効果」

効果があると思って飲んだら薬でなくても自己暗示にかかって治っちゃう。『プラシーボ効果』も、詳しくは知らないけれど。

他に考えられるのは、四滴のブランデーか。普段アルコールを飲まない人であれば、ちよつとでもリラックス効果や自己暗示効果があるかもしれない。

「病氣の原因になる物を希釈して、物質として検出されなくなるま

で薄めたのを砂糖で固めた『ホメオパシー』という民間薬もあるの。物質として検出されないところまで希釈した毒が、希釈する前のその毒が引き起こすのと同じ症状に対し、癒すんだって」

「それは絶対に残っているんだよ、物質が。もしも効果があるならね」

「だよね。わたしもそう思う……」

テレビをつけるとラグビー中継のテーマ音楽『スポーツショー行進曲』が流れている。??たらたらーたらたらたらららら、ビデオも録画予約した通り動作音を立てている。「っしゅ」とジュンくんが何に対してかガッツポーズを取る。たぶん、試合開始に間に合ったことに対してなんだろう。

それらを背に、私はノートパソコンの起動ボタンを押した。起動時の電子音Fの音階がわたしの頭の中に鳴り渡る。

メールが来ている。

件名…むかしはものをおもわざりキック

差出人…雨宮へロボコップ2@雨宮.com

TO…好川夢子へメロン@εv.com

夢子さん

こんにちは。夢子さんって船橋に住んでるんですね。僕、市川なんで近くてびっくりしました。ホームセンターが近くにできて便利ですね。僕も、グッズ制作の材料調達によく行っています。

＜フラワーレメディの効果

フラワーレメディが効くとして、その根拠は、科学とは別の成り立ちにあると思ってください。いわば地図に載っていない土地のようなものです。そんなものないと言えませんが。夢子さんが地図だけが地球だと思うのなら、存在しない国です。科学で説明されれば安心

という発想は怖い。いい加減な実験で作ったデータには気をつけて。
くでは、ファンタジーのようなものですか。あるといっている人に
だけある空想の世界

あるといっている人にだけある、というより、ないと言う人にはな
い、という方が合うと僕は思いますね。

僕は、超常現象を自分の目で見たことがありますよ。シャーマンが
呪文を唱えて人を動けなくしたのに立ち会いました。七十年代に大
ヒットした縄文シールの開発者・鬼怒川博士の勉強会に参加してい
たんです。ここにはシャーマンやエスパーが集まります。本場中国
まで行って風水師にも会ったことがあります。だけど僕は超常現象
が「ある」とは言いません。僕は好きで調べているだけだし、自分
の願望実現に役立てることもありますが（洗脳には気をつけて。洗脳
の定義は一定ではないようですが。僕は、自由意志でいつでもそれ
をやめられることと、僕なりの基準ですが金額が妥当か、の二点は
必ず、気をつけています）。

夢子さんは、自分で実際にレメディの効果を体験しました？

くくところで夢子さんって作家だったそうですね。サスペンスやミ
ステリは僕も読みますし、好きですよ。どんなものを

く純文学です。わたしは書きたいという衝動が起きるままに書いて
います。本で対話をする。わたしは文章に夢中です。それに、本は
みんな好きです。

わはははは。純文学ですか。難しいことに挑戦しているのですね。
一般的に言って、本はなかなか売れないそうですね。エンタメな
らまだ書きようがありそうですね。

「衝動」で頑張って書いてください。僕には表現活動と自慰行為の

区別がつきません。

あなたの願望実現をお手伝いするグッズとオルタナ科学情報サイト
不思議ショップ「ジュエルオー〇〇」

URL: 〇〇ー〇・COM

運営者 雨宮凜二（ロボコップ2@雨宮・com）

追伸..

僕は次の週末を使って旅行に行きます。月曜日の夜までメールチェックできません。

「藤森兄！ 弟にパス！ やたっ！ トライ！」

家の中なのに、ジュンくんが絶叫する。

わたしは泣きたい気持ちだった。わーん、バカにされた。衝動なんて言わなきゃ良かった。ぐらつく心。ヨワツチイ。なにもひとの言葉を取り上げてそだけ強調しなくてもいいじゃないのさ。ぐすん。この世に嫌味なんて要らないわ。返信ボタンを押す。

雨宮さん 感傷的で感情的だけれど、読んでください。

わたしの書く本は、押し花を作る用くらいには役立ちます。

または、喧嘩した時恋人に投げる本、にして欲しいのです。もしかしたら拾って読んだ恋人が機嫌を直すかもしれない。心を込めて書いている。

生きていればそれが表現活動なのだわたしは思っています。普通に生きているだけでも。どのひとも。猥雑な言葉で言い捨てることはできない。

確かにわたしは衝動?? 火星から降って来た本?? こっち向いて投げかけられた赤い本、次は青い本、少なくとも九四冊はある?? を

キャッチして順番に写す作業??で書いているけれど、それほど身勝手な世界ではないです。

インスタスケープ
わたしの心景は、
世界は、相互的です。

ひとのしていることを鳥瞰して貶めることで、自尊心を保てる気がしたとしても、そんな自尊心は所詮、蜃気楼です。本当の自尊心ではありません。

P・S・

こっち向いて投げかけられた九四冊の本には、他に、ラムネのビン色の本、うろのあるリングの木色の本、ふわふわのバタークリーム色の本、しましま模様のネコ色の本、ムーミン谷でスノークが買った青い表紙のノート色の本、金色の鍵のついた本、などがあります。と、わたしは泣きながらメールの返信を書いた。へんにタイピング速度が早くなった。メールでこんなに動揺するなんて。結局、メールは相手のところに飛んでは行かず私の胸に刺さった。送信ボタンを押さずに破棄したのだ。送信しても私の胸に刺さるのだと思う。わたしがメールに書いたことは、わたしのためにあるのだと思う。少なくとも、雨宮さんに向けて言うことじゃない。

テレビではラグビーの前半戦が終わっていた。後半戦が始まるまでの間、前半の回想VTRが流れ、アナウンサーとラグビー部OBの人の対談による解説が始まる。

かすかに大学の応援歌の断片がスピーカーから流れてくる。ジュンくんがそれに合わせて歌い出す。

大学の歌がわたしはちよっぴり苦手だ。耳を塞ぎたい気持ちでキッチンに逃げ込む。

マンゴーティーを二つ作る。甘い香りがはっきりしていて、フレイバーティーの中でもっとも好きだ。少し気分が良くなった。良い

香りはオバケを遠ざけると、雨宮さんが言っていたのを思い出した。部屋に戻ると、ジュンくんが携帯電話で話していた。テーブルにカップを置く頃には携帯を折り畳んでいた。

「今日、及川と飲むと言っていたけど、急に及川の都合悪くなったから、行かないことになった。紅茶ありがと」

「そっか」

「どったの、君、目が赤いよ」

わたしはなにも言わずに変な表情をしてみせた。なんともないと言ったことが伝わったらしくジュンくんは「ブサイクゆっちゃん」と噴き出し、デコピンしてきた。ちよつとだけ痛い。

後半戦が始まっていた。再びジュンくんが歓声をあげている。

パソコンを見ると、メッセージャーが自動的にオンラインになっている。「AIN」からアクセスがあったと知らせる小さなウィンドウが開いている。

わたしはクローゼットから出しておいたヘッドセットマイクロフォンをパソコンに接続した。

「ジュンくん。ちよつとだけメッセージャーで喋る。ちよつとだけ。

ごめんね」

「うん、いやったあああああ。トライ！ また藤森だ！」

『Melon』の発言 マイクせつぞくした。

『AIN』の発言 いる？

「もしもし、ゆー？」

声を発した。アイン、または、ゆーの声を待つ。

『ユメコ？ ユメコ？ ユメコ！ 元気してた？』

昨日メッセージャーでほんのちよつとチャットしたただけなのに、ゆーは前から知り合いだったみたいな声の調子だった。なんだか羨ましい。

「ゆー。元気だよ」

『ちゅっ』

「いゃん」

『ノリ悪くない？』

ゆーが笑う。

ノリが良いとか悪いとかではなく。ジュンくんに誤解されるようなこと言いたくないだけだ。ほとんど喋ったことがないのに、いきなりキスの距離感。互いの姿も知らないけど。遠いんだか近いんだか。

『ユメコの声、可愛いね。さて、鹿蹄村のことだったね』

「わあ、覚えていてくれてありがとう！」

『昨日だもん、覚えているよ。どうして知りたいの』

「ありがとう。小学生時代の友達の手紙に、鎧井郡青葉町大字鹿蹄ってあったんだけど、探してもネットの地図に載ってないの。これ、鹿蹄村だった場所じゃないかと思って。『キタムラ』で話題になってた地図にない村」

『マドレーヌ貴婦人の？』

マドレーヌ貴婦人という言葉を実際に誰かが発音しているのを聞くとは思わなかった。だから何と言うわけでもないけれど、微かに「体験」をした気がした。ゆーの声は、返事を待たずにヘッドフォンから聞こえて来た。若い男性の声だ。

『俺も気になってるんだ。行き方はわかるよ。ユメコの言った住所、たぶんドンピシャリだよ。そこが村だったんだ。青葉町大字鹿蹄という地名は抹消されて、若葉市鹿蹄という新住所になっている。鹿蹄山と麓の一带が鹿蹄という地名で、地域内にダムがある』

ダム。ダムと聞くだけで、わたしはさぶいぼだ。大きな物が怖い。めまいがしそうだ。

「ひ、ひえ」

ちよつと息が苦しくなってきた。

れい君……。れい君の家のあった町はダムの底にあるんだ。

『行く？ ホワイトランドみたいにレポートする？ サイトに載せたいな』

「ダムが、ダムが、ダムが」

『行かないか』

ダムが、しか言っていないけど何となく会話になった。

「ゆーは、行く予定ない？　すごく……勝手な要望なんだけど、レポ？トして欲しい、です」

頼み込んだ。自分で行け夢子、とは思っけれど。思っばかりだった。ミステリアスな村、ダム、心霊スポットの遊園地……鹿蹄山に、実際には行く勇気がない。

『いいよ。やったげるよ』

「ええっ。まじ嬉しいんだけど。だけど、いいの？　ちょっと頼んだけどなのに、本当に行ってくれるなんて」

『実はね、ユメコだけじゃないんだ、数日前から、この件で他の人もメッセで話してたんだよ。二人いる。俺と三人で一緒に探検することになった。一人は、東京に住んでいる作家。名前はまだ言えないけど、最近、すごく人気ある』

……それは源有理さんに違いない。鹿蹄山の資料を見ていと言っていたから。わたしがキタムラを教えた流れで、ゆーとメッセンジャーをした、そんな気がした。直感だ。合っているかどうかはいつか分かるだろう。

『来週末に行くから待ってて。あと、俺の顔』

ゆーがメッセンジャーの機能を使ってウェブカメラの映像を送って来た。

率直に言っ、とても美しい顔立ちだ。リバー・フェニックスかと思っった。

それを見てから、なんだか、わたしは、ほんのちよっただけ苛々し続けた。理由はわからない。人がこちらのそれほど期待していないことをした、それだけのことだ。また微かに「体験」した気がした。マドレーヌ貴婦人に引き続き体験した。

スマイルマークのマスクをとったゆーの顔。褒めなきやいけないのか、褒めなくていいのか、悩んだ。褒めてもいいが、もし喜ばないならば褒めないほうがいい。

ゆーの顔がかっこよくてもみにくくても、わたしには興味がない。友人になる予感もしない。

「吃驚した。……クールだよ」

かっこいいという言葉は使わなかった。ジュンくんが振り返りそうだったから。わたしは恋人に誤解されたくないし、ゆーからも悪く思われたくなかった。

『ありがつ』

ゆーは喜んだ。わたしは少し嬉しくなった。ちょっとゆーに好感を持った。

メッセンジャーを終えてジュンくんを見ると、ソファにもたれて眼鏡をかけたままねむっていた。普段コンタクトレンズをしているので、眼鏡をかけている姿には微かに違和感を覚えた。毛布をかけ、テレビを消したら目を覚ました。

「ゆっちゃん、俺は疲れたよ。窓口に、毎日、毎日、人が来る。いろんな人が来る。みな同じように対応しても怒る人がいる。みな同じように対応すると怒る人もいる。職場の人とはまあまあうまくいってるけどさ……でも、総務課には仕事に必要な本を買おうとしただけで文句を言う人がいるんだ。何を言っているのか俺にはわからんよ。ゆっちゃんはいいなあ、ずっと家にいられて」

わたしは頷いた。

「外に働きに出てみようかな」

「そっか」

ジュンくんはわたしの頭をちよつとだけ撫でた。ネコに興味のない人がネコ好きな人のペットを触っているみたいな仕草だった。でも、嫌いじゃない。

「夢子さーん」

メッセンジャーの映像がワンピースの女性を映し出した。今日もお洋服は淡いピンク色。薄ーい林家パー子さん。手を降っている。

有理さんがパソコンの中にいた。こっちの声は聞こえない様子。こっちからは映像も送っていない。彼女はカメラに向かってただ手を振っている。

「ユメコ！」

リバー・フェニックスも手を振る。顔近づけすぎ。

「夢子さん」

若い雰囲気のおじさんが映った。誰やねん。

「雨宮です」

ロボコップ2だ！ ……雨宮さんは、青山のクラブにいても違和感のない今風の格好をしていた。きれいに整えた髪型、かっこいい眼鏡とスーツ。たぶん、モッズ・スタイル。小さなマイクを画面の外にいる人に渡している。

「今ね、有理さんの泊まってるホテルのロビーでネットしてるの』映っているのは雨宮さんで、ゆーの声が聞こえて来た。

「朝ご飯を食べてから鹿蹄村を探しに行く予定。二人ともユメコのこと知ってるって聞いて驚いたよ」

「わたしも。有理さんはともかく。どうして雨宮さんがいるの」

「有理さんと知り合いなんだって。ユメコと同じで、地図にない村に興味があるんだって」

同じ、とは違う。それぞれ別の目的で地図にない村を探しているんだ。ゆーはサイト作成のために。有理さんはよく分からないけれど、鹿蹄山事件の資料を見るうちにミステリアスな村のことも気になったのだろう。雨宮さんはきつと超常現象に興味があるのだと思う。UFOが飛来するとキタムラに書いてあったし。

三人が揃って画面に映る。リバー・フェニックスと林家パー子さんとモッズ。異色トリオだ。ここにわたしが加われば、きつとそれは何らかのカルテット（四重奏）。

「そいでは一旦、接続切ります。これからコンビニに地図を買いに行きます。そうだ、ユメコに携帯番号とメアド送ります。深夜になっても俺たちから連絡がなかったら、通報して欲しい。写真は夕方

になると思うけど戻ってきたら、俺のサイト『セフィロトの樹』にアップして行く予定」

「うん、楽しみにしている。気をつけてね」

パソコンはそのままにして、わたしもコンビニに行くことにした。元酒屋だったのを食料品・雑貨店に改装して深夜まで営業している店『トリアス』が自宅の近くにある。総菜などは充実しているが、ホットケースに入っているような食べ物は扱っていない。今日は、アメリカンドッグが食べたいので、トリアスを通り過ぎて少し遠くにあるコンビニに行くことにした。秩父宮ラグビー場まで大学ラグビーをジュン君と観に行くときはいつも、千駄ヶ谷のコンビニでアメリカンドッグを買って行くのだ。そんな気分になっていた。ひとが危険を覚悟で実際にミステリアスな村に探検しに行くのを、呑気に自宅で物食べながら見物。これって「希薄な現実感覚」ごっこかも。わたしにとっては結構、リアル。

コンビニに入りカゴを持つ。食べたい物がたくさんある。ハート型のワッフル、冷たい焼き肉、ももいろのぼうつきキャンディ、しようがいりクッキー、ほしいいちじく6（む）はこ、コーヒークリーム・ビスケット、アンチョビのピッツァ、木いちごのジュース、こけもものジャム、ひとくちずつ味が変わるスカイ・バー・チョコレート、ミモザのサラダ、ムーミンママの手紙のついたサンドウィッチ、甘い丸いパン。愛らしく幸福に満ちた明るい輝きをはなつお菓子やお料理たち???本に出てくるものばかり??

カゴに次々、食べ物を入れて行く。でも、また元の棚に戻した。買う仕草を見ると、少し気持ちが収まった。

食べたい物を全て食べたこともある。ハンバーガーやカップラーメン、チョコレート、ケーキ、パンなど、繰り返し同じものが食べたくなった。満腹なのに食べなくなるのだ。身体の中がきしみ、とても苦しい。

部屋に戻って来てコンビニで買って来たものを広げる。雑穀おにぎり、ケールのジュース、にぼし、脂肪と炭水化物と糖の吸収を抑

えるサプリとアメリカンドッグ。

キッチンから取って来たりんごを食べる。

暗転した画面の前に座る。少しマウスに指先で触れると、青くて明るい光がぼっと点いた。

ゆーからメッセンジャーでメッセージが来ていて、電話番号が書いてあった。こちらの携帯番号を教える目的で、かけてみる。

呼び出し音が切れ向こうの世界の音が来た。

サーという風か砂嵐のような音と、人の声もする。遠くで音楽が鳴り始めた。ぱーらぱらららー……ぱららららー『幸せは歩いて来ないだから歩いて行くんだよ』という歌声が聴こえて来た。ノイズ混じりの放送だ。

「もしもし」

わたしは電話の相手を探した。

「もしもし。聞こえますか」

人生はワンツーパンチ。汗かきベそかき歩こうよ。ワン、ワン！
イヌの声が聞こえて来た。自転車のベルの音もする。商店街かな。
アーケードがあって豆腐屋とかお茶屋とか並んでいる。

「もしもし！」

ワン、ワン！ イヌは、ダンキンドーナッツに入った飼い主が戻って来るのを待っているんだろうか。胸を張って足を上げて、ワンツー！ ワンツー！ 休まないで歩け。

「もしもし！ ユメコ」

少し遠いけれど、ゆーの声がした。

「ゆー！」

名前を呼んだ。少し心地よかった。

「いまね、まだホテルのロビーにいる」
意外だった。

「二人が戻って来たから、行くね。村に到着したらまた電話かメールする。圏外になるってキタムラに載ってたから、試してみる。キタムラは携帯でも書き込めるから、経過を書き込むよ。『まとめ』」

じゃなくて、メイン掲示板の『ミルク紅茶』のほうね」

「うん。気をつけて行ってらっしゃい」

電話を切った。

そっか、しばらくは一人ぼちなんだ。メッセージャーが来るわけでもないし、『セフィロトの樹』の更新もずっと後だし、電話が掛かってくるのもいつか分からない。ジュンくんは土曜日もやっている眼科の、定期検診に出かけている。

りんごをかじったら音が部屋に響いた。寂しい。

ケールジュースを飲んだ。

サプリを飲む。

コーヒーをいれた。

談話室『キタムラ』を開いた。最後に見たのは第三章で、「アイン&あいきのサイトはここ」としか書いてなかったページも今は少し書き足されていた。二人が無事に帰って来たことを喜び称えるコメントがたくさんあったのと、あいきの発言があった。

『no title』発言者 no name さん／発言日4月2日23時02分

おかえりなさい！

— — — — —
— — — — —
— — — — —

『戻って来た』発言者 あいき さん／発言日4月2日23時24分

いやっほう。気分は、ご開脚！ イエイッ。おまんこ。酔ってるからおかしいこと言いたい気分。酔ってなくても言うけど。おっぱい礼賛おっぱい讃歌。フニャフニャチンコ、略してフニャチン。

[illegible]

『no title』 発言者 no name さん／発言日4月2日23時30

どうだった？

[illegible]

『ホワイトランド、』 発言者 あいき さん／発言日 4月2日 23時37

行つて来たよん。帰りがけこわかった。道路沿いに墓地があるんだけど、お墓が燃えてて超吃驚した。墓石から火が出てるの。近くに
あつた家の人に知らせたら大慌てで消してたよ。

[illegible]

『no title』 発言者 no name さん／発言日4月2日23時40

それって霊の仕業では……！

『no	—	—	—
title』	—	—	—
発言者	—	—	—
あいき	—	—	—
さん／	—	—	—
発言日	—	—	—
4月2日	—	—	—
23	—	—	—

時47

心霊スポットの帰りなだけにあたしも一瞬そう思ったー。
たぶん、タバコのぽいすて。生きてる人のほうが怖いでつ。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

昼になっても電話がかかって来なかった。圏外なのか。

談話室キタムラのメイン掲示板を見た。メイン掲示板は話題別に
部屋分かれていて、それぞれ「ミルク紅茶」「ケーキセット」「石
釜焙煎コーヒー」など喫茶店のメニュー風の名前がつけられていた。
どれがどういう話題の掲示板なのか見慣れなかったが、ゆーが書き
込んでいる部屋をクリックした。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

談話室キタムラ ミルク紅茶

— — — — —
— — — — —
— — — — —

『行ってきます』 発言者 アイン さん／発言日10月29日9時
55分

ホテルの前からバスに乗りました。りぼんチャン、リンジーと俺と
三人で謎の村探検に行ってきます。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

『行ってらっしゃい』発言者 no name さん／発言日10月29日9時59分

魔よけに塩を包んで持って行くことをすすめます。無事に帰って来いよ！

— — — — —
— — — — —
— — — — —

『no title』発言者 no name さん／発言日10月29日10時03分

神のご加護を！ 三人の道中をお守りください。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

『no title』発言者 no name さん／発言日10月29日10時05分

三人を乗せたバスは鹿蹄山の濃霧に吸い込まれ……。着いたところは、山の中。バスを降ろされ迷っていると一軒家が現れた。しょうがない、ここで一夜を明かすかと、ドンドン、ドンドン、壊れた玄関を叩いてみれば、軋みながら戸が開く、ぎいぎいぎい。

「鹿蹄村ようこそ」

なんとまあ美しい娘よと、ほっとした三人は案内されるまま中に入って……。 つづく

— — — — —
— — — — —
— — — — —

『no title』発言者 no name さん／発言日10月29日日10時14分

そして三人は帰らぬ人となりました。キャーキャーキャー。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

— — — — —
『no title』発言者 no name さん／発言日10
月29日10時25分
不吉なこと書くなつての（笑）。 アイン、りぼん、リンジー、か
えってこーい。
— — — — —
— — — — —
— — — — —

見送りの言葉、無事を祈る言葉、不安を連想するレスがいくつも
書き込まれていた。どれくらいの人がこのサイトを見ているのだろ
う。

時計を見ると午後一時前。続きを読む。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

『no title』発言者 no name さん／発言日10
月29日12時21分
三人は無事に着いたかな。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

『no title』発言者 no name さん／発言日10
月29日12時35分
そろそろ連絡がないとまずいんじゃないか。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

『no title』発言者 no name さん／発言日10

月29日13時40分

おい。アイン。だいじょうぶかい。圏外なのかな。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

『no title』発言者 no name さん／発言日10
月29日13時48分

とらわれたか？ 鉈持った村人や野良犬がいたときのために、催涙
スプレーとか持って行くべきだったな。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

わたしはにぼしの袋を開けてデザート皿に移した。まだ少しは空
腹のはずだけど食べたくなかった。

紅茶をいれた。飲むと胃から喉まできゅっとなった。飲んだ紅茶
が体内に入る。熱と味が不快だと気づいたあたりでいっぺん
に具合悪くなった。身体的な病気でもないのに具合が悪くなると、
とびきり孤独の不安に襲われる。鼓動が自分にまで聞こえて顔や手
に汗が噴き出す。指先は冷たいのに、身体は暑くて寒い。

横になろうと思ったが、ゆうパックに手を伸ばした。願望の箱を！

三人の無事という願望を叶えてください。

わたしはゆうパックの箱に手を入れて願望の箱を掴んだ。

「ゴゴン！」

ジュンくんだ。ドアガードが引っ掛かっている音がした。日頃は
たやすく物音を立てる人ではない。早く開けに行かなきゃ。夢中で
立ち上がる。願望の箱はひとまず置いておいた。

「おかえりなさい」「DVD借りて来た」

DVDを借りて来るのは疲れているときが多い。

部屋に戻って願望の箱を手取る。そういえば、これって中はど

うなっているんだろう。見たい！ 継ぎ目が接着されていないのを見て、開けてみる。

あ、と小さい声を上げてしまった。

紙きれが一枚入っていて、

『開けてはいけない』

と書いてあった。それ以外は、箱の中は殆ど、空だ。

正確には、電子パーツが入ってはいた。電源ランプを点灯するための導線と小さな乾電池だ。

それ以外は、銅線を巻き付けた小さなコイルが二つ入っているだけだった。銅線は二つあるダイヤルにそれぞれとりつけられているが、電気を通すようにはなっていない。

パーツがたったこれだけなら、六分の一の大きさ、きのこの山の箱にもラクに入る。ふたを閉じた。

なんなのこれ。それでも。

わたしは祈る。と思う。

テレビの音が聞こえる。紅茶を入れようと思って振り返ると、ジュンくんがコンビニで買ったバナナミルクにストローを刺して飲んでいた。横には好物ハートチップルの小袋が置いてある。借りて来たのはボビンタウトのライブだった。ジュンくんは、こちらから見ると横向きだ。テレビを見て楽しそうな表情で固定されている。横顔が影絵に見えた。

テレビからは「『月月火水木金金』の着メロ作ってるんだ」という台詞と、作りかけの着メロの音、客席の笑い声が聞こえて来た。

携帯にメールが着信したのは、午後六時半頃だった。そのときわたしは回転寿司屋にいて食べやすくカットされたパイナップルの皿を取った後だった。ジュンくんが「デザートを食べたいなら帰りにスーパーで買おうよ」と制止したのをわたしはどうしても聞かなかった。パイナップルにフォークがついていなかったのので箸で食べようとしたら、店の人がちよっと笑ってフォークを持って来てくれた。

君ねえ！ とジュンくんはたしなめた。わたしの携帯が、初期設定のままのメール着信音を小さく短く鳴らす。

家を出る前にキタムラを見てきたが、ミルク紅茶にはゆーからの書き込みはなされていなかった。相変わらず案ずる書き込みや村のうわさ話しがぼつぼつと書き込まれていた。

ジュンくん「メール見るね」と言ってから携帯を開く。ゆーからだ。

メールには、写真が添付されていた。

両側に樹があり合間に叢が覗いている。森？ 雑木林？

件名…これから帰ります。

無事です。ハイホーハイホー！？

わたしはパイナップルをひとくち食べた。

「撃墜王の手紙、あったでしょ、差出人のおうちがあったところを見て来てもらった。知り合いのライターさんと、クライアントさんと、ネットで知り合った男子」

「合点承知の助」

「なんかすごいミステリアスな村だってネットで話題になってて。その子のおうちがあったはずの町が地図に載ってないの。市町村の合併で地名が抹消されてるからみたい。抹消されたのは確か一昨年くらいだったと思う」

わたしは印象の強く残っていることから話した。

「ああ、二〇〇五年まで合併ピークだったからな。二〇〇五年に合併新法が施行されたから、それ以降も合併が進められてるよ」

会計を終えて回転寿司店を出る。この店は食材が新鮮だ。しばしば満席になる。改装してからは、カフェの前菜みたいなものもメニューに乗って回っている。

買い物をして、部屋に戻る。

わたしは携帯メールで「気をつけて」と返信した。キタムラを見るとまだゆーやりばんチャンやリンジーの書き込みはなかった。

お風呂からシャワーの音が聞こえて来た。ジュンくんが『雨に濡

れても』を歌っている。

願望の箱の使い方を途中までしか見ていないことを思い出した。雨宮さんの運営している不思議ショップ『〇〇^{ジェルオー}』の会員サイトにログインして最後まで見た。一日一回電源を入れるとより効果的だと書いてあった。箱の中に入っている電気回路ではない回路を元にしたパーツの説明も書いてある。要は『氣』の流れを表現した図なのだそう。物や人を『エネルギー』⇨『氣』だとする考え方を前提にしている、『氣』が願望にあう流れをすれば叶うということだった。氣という字が少しむずむずする。氣の正字で、「气」が天体をあらわし、「米」の字は四方八方にエネルギーが広がるという意味なのだそう。また、ダイヤルでレートを出すのは、つまり『ダウジング』と同じだと書いてある。ダイヤルを回すひと自身が氣を感じ取ったところに指が引かかる。箱そのものが作動するわけではない、使うひとに依存する箱である。いわば単体の箱自体に意味はないのである。まだピンと来ないが、そんな風なことが書いてあった。

わたしはれい君の手紙と、さっき受信したメールの画像を表示させた携帯電話を願望の箱の前に起き、ダイヤルを回し始めた。無事を祈りながら引かかる箇所を探すのだ。ダイヤルの周りに書いてある数字のどこで引かったかを書きとめ、その数値にし続ける、で使い方は合っている、と思う。引かかる箇所は容易に見つかった。

一年の三分の一も一緒に過ごさなかったれい君の家。奇妙な村……。

病死した、れい君。病氣前のれい君。

ネコの消しゴムの映像が瞬く。もう絵柄も形もよく覚えてない。でも持っていたのは覚えている。おうちで飼っていた猫のたまが好きだったので、よく似たネコの写真のついた消しゴムがあるのが嬉しくて二個買った。

二個とも学校に持って行ったら、休み時間に人だかりができて、

要らないものを持って来ている、なんで持って来たのか、と問いた
だされた風になった、と思う。見せびらかしたかった、とすらも認
識できない程度の、感情の隆起がその動機であった、と思う。無邪
気。いまならウザイで終わる話だろうけど。

授業の合間に、わたしはいい君に消しゴムを見せてと言われたら
しく、筆箱を開けて見せた。「いいなあ！」と彼は言った。「いい
なあ！」と言って笑った顔は覚えている。次の場面が瞬く。

「ありがとう！」

すぐれい君にあげたのも、覚えている。

キタムラのミルク紅茶を見ると、「無事だったよん。りぼんチャ
ンの泊まってるホテルから書き込んです。」というゆーの書き込
みがあった。「治外法権の看板あった？」「割れた手鏡あった？」

「村はあった？」などと「no name」「no title」
からの質問攻めにあい、「俺のサイトに写真をアップしたから見て」
と答えている。

すぐに「セフィロトの樹」を開く。以前の、ホワイトランド探検
のページはなくなっていた。真っ暗なページが現れ、ENTERの
白文字が光っている。

クリックすると、森の日影の中で分岐している道路の写真が現れ
た。「国道の分岐点とミステリアスな公園間にある見落としそうな
道を探した。すると、確かにあった。この道を行くと何があるのか、
我々は先を急いだ。」

右下にSTARTという文字があったのでクリックする。

スライドショウが現れた。三六あるファイルの読み込みが始まり、
二十、十と、残りのファイル数がどんどん減って行く。零になった
瞬間『鹿蹄村』という文字がフェイドインしフェイドアウトした。

あ、と声が出てしまった。

明るい。

清涼でたっぷりある陽射し。

「村はひっそりしていた。」

樹々と小川と原っぱが映っている。太陽に透けるライム色の葉のカーテンの開いた先には白い輝きを纏った草がなだらかに群生し、小川は砂利の上を光の束となり流れている。

「空気が澄んでいた。水も透きとおっている。小鳥が囀っている。」
カメラのレンズが少しの間、森を散策する。土のまま均された道路がある。道路は森に囲まれた広場に続いていた。家が三軒見える。

「廃屋。外壁は板張り。屋根は瓦葺き。玄関は封鎖されている。」

屋根以外の見えている部分がみんな褐色の木で出来た家が映っていた。入り口に青緑色の板が打ち付けてある。横には、壊れた扇風機と傷だらけの白いスーツケースが置きっぱなしになっている。二階建てで、三つ隙間なく並んだ窓にはガラスは抜いてあるけれども中が見えるわけでなく、黒い穴だった。映像が移り変わる。

「炭焼き小屋。今も使用している気配。」

三角の大きな屋根と骨組みばかりの、がらんとした建物が見える。

「わりと新しい家もある。」

変哲のない洋風の民家。塀から覗いている木に柿がたくさんなっている。塀の前には黄色や紫の花が咲いている。プランターが並んでいた。

「集会所を過ぎて見上げると田が連なっていた。」

段々畑。収穫が終わり、藁が積み上げられている。家もちらほらある。わたしが子供の頃にはあったような外観の家ばかりだ。

「最後に。農作業をしていたおじいさん。親切にも食事に誘ってくれた。」

屋内。食卓で目玉やきを箸でつついているおじいさんが写っていた。箸の持ち方、は、合っているが、箸先の向きが揃っていない。「戦争に行つて困らないようにという母親の配慮で、もとは左利きだったのを右利きになおされたのだそう。おじいさんの戦争体験、萌え〜。」

おばあさんが手を伸ばして黄身を切っている。

次の写真は、おじいさんが黄身を箸で摘んでご飯に乗せていた。

「仲睦まじいご夫婦だった」

食卓を囲んでみな笑顔の記念写真。

そこでスライドショーは終わった。

終わる少し前に、ギルバート・O・サリバンの「アローンアゲイン」を歌いながらジュンくんがお風呂からあがって来ていた。

牛乳をグラスに注ごうとしたら、シュールベルトの『野ばら』のメロディが鳴った。ゆーから電話だ。『野ばら』はわたしの好きな映画の挿入曲だ。

『ハイホー』

ゆーが電話口で言う。

「もしもし」『ハイホー』「おかえりなさい」『ハイホー!』

「ハイホー教?」

わたしがそんなことを言うと、ジュンくんが「ハイホー! ハイホー!」と白雪姫の小人の歌を歌いながら、歩いて行った。ドライヤーの音が聞こえて来る。わたしは牛乳を仕舞った。

『うん。雨宮さんが学生時代にグリークラブ入ってて、道中、テノールで歌っていたの。最初はカコワルーと思ったけど、一緒に歌ってみたら楽しくなった。有理さんと三人で、ハイホーって、ハイキングしたよ。久しぶりに楽しかったなあ。昔の歌はいいな、楽しいな。ユメコも来れば良かったのに。サイト見た? 写真アップしたよ』

わたしは一枚目の写真を見たことを言った。

『ひっそりしていた。それに、長閑だったよ。自然の多い、景色のきれいなところだ』

「のどか? なるほど。きれいね」

『うん。ほんとひっそりしていたよ。村は、ひっそりしていた。よくもまああんなに好き放題言われたもんだと思う。興味本位で来る者が後を断たず、住民が迷惑しているよ。っていうか俺も興味本位だけど。キタムラに、この村で行方不明になった家出少女がいるっ

という話があったけど、調べてみたところ隣県で起きた事件で、それがホワイランド事件と混同されて怪談になったのだと思う。』

地元の人の話では、『治外法権の看板』はよそから来てゴミを捨てたり落書きしたりする者に困り果てた住民が、威嚇するために一時期立てて置いたことがあったのだそう。鏡やミールも、よそから来た者が投棄したゴミだろうということだった。いたずらでマネキンを置いて、来た人を怖がらせようとする者もいるそう。鉈を持って追いかけるというのも、農作業中だっただけなのかも。入れ替わり知らない者がやって来て荒らしていくなんて、考えただけでも怖い。

「村、あったんだ」

『村らしきものがねずっと昔から住んでいる地元のひとと、ダムを作るときに、引越して来た住民と、戦後すぐから住んでいる、行政の指導下で水田の開拓をするために入植した住民の集落なんだった。鹿蹄の中で佐倉と呼ばれている土地。スライドショウに写っていた家がみんなそうだよ。みんなセコムに入ってるって。廃屋は戦前から住んでいたけど七十年代に引越して行ってしまった人のだって。ユメコの友達が住んでいたのは佐倉じゃないよ。次のページ見て』

佐倉の開拓地のおじいさんがいいひとだったよ。という話を聞きながら、わたしはマウスを動かして画面の下の方にあったNEXTの文字をクリックした。

水没した建物の屋根が小さく写っている。ダムだ。

『水位が下がって赤い可愛い橋が見えているでしょう。ダムの底に沈んだ村にあった橋だよ。白い建物は役所だって。水位が下がって、天気の良い霧のない日だけに見えるんだ。これは地元のひとが見せてくれた写真をさらにデジカメで撮ったものだよ。実際に見に行ったらけど、底に沈んだ村は見えなかった。本来の鹿蹄村というのはこのダムに沈んだ村のことだそうだよ。ユメコの友達の家もここにあったんだ。地元のひとと、若葉市役所のひとに聞いたから間違いは

ないよ。鹿蹄村に住んでいたひとの殆どは都市部に引っ越し、残った少しのひとが佐倉に家移して住み直したんだって』

わたしは電話口で頷いていた。あ、何か喋らなきゃ！

「……。……。ありがと。ここに住んでいたんだ。れい君」

今の気持ちは言葉にならない。わたしの語彙力による。造語するなら、気の毒キモ悲しい？ 違うな。キモくはない。もっと他己で。ん。れい君、哉。今の気持ちは、「れい君」だ。れい君はもういないのかな……。

「ゆー、ありがと。れい君の家、探してくれたんだ。嬉しい」

『どういたしまして』

「ゆーって親切」

なんて良いひとなんだ。ネットの地図で見ると、若葉市役所って駅から二十分くらい歩くところにある。ここまで行っただ。

『俺、ユメコと実際には会ったわけではないよ。わからんよそんなことは』

そうかな、とわたしは返事した。

『そういえば、君はどこにいるの』

ジュンくんが歯を磨き終えて戻って来た。

船橋だとわたしが答えたら、「教えるな」とジュンくんの声がした。

話し終えて受話ボタンを押した瞬間、すごく近くでジュンくんの声がした。

「なんで知らない人に住んでる場所、教えるの。君、もう寝るよ。早くパソコン片して」

歯を磨いて部屋に戻ると、ジュンくんがベッドに入っていた。

電気を消して隣に潜り込む。壁とジュンくんの間だ。寝ていると、ときどきものすごく狭くなっていることもあるし、ジュンくんが落ちそうになっていることもある。発作で息を切らしながら目を覚ますと、すばやく手をぎゅっと握ってくれる。

「君、ベッド選んでおいてくれた？ 引っ越した日に届くように注

文するんだよ」

「うん。通販で良いでしょ？ ネットショップはいくつか知ってる」
「候補をいくつか絞っておいてくれよ。俺は選んでいる時間がないんだから」

「うん。わたしも最近、帰るの遅いけど」

外で働こうかなとひとつ前の週末に言った時すでに求人に応募して返事を貰っていたわたしは、次の日の月曜日から平日は毎日、千駄ヶ谷の小さな整体院でアルバイトをしていた。今年の春から整体より英国式リフレクソロジーに力を入れている。仕事は受付で、来客のないときは読書するなど好きに過ごして良かった。予約なしの来客があると、船橋に帰って来るのが午後九時を過ぎる。

「そんなに千駄ヶ谷が好きなら千駄ヶ谷に住めばいい」

台詞みたいな言葉がウソとは限らない。わたしは信じていなかった。

けれど、次の週には部屋を決めなくてはならなかった。

地下鉄で居眠りしたら、手すりに頭をぶつけた。またうとうとしたら、またぶつけた。またうとうとしていたら、誰かが置いて行つたフリーペーパーが上から降って来た。ごつつ、ごつつ、バサバサバサッ。向かいの席の小学生が笑っている。

一向に構わず、わたしはうとうとしていた。

印刷工場の外で待っていたら、倉庫に似た建物からリバー・フェニックスが出て来た。木枠に乗った印刷物の山とフォークリフトを避けながら近づいて来る。途中、守衛に寄って服につけていたネームカードを渡し、置いてある紙に時刻を記入する。チャコールグレイのジップアップ・ジャケットにジーンズ、ライダーズブーツ。

駅構内から地上に出ると、僅かばかり雨が降っていた。でも、ミルク色の雲から柔らかい日射しが表参道に降り注いでいる。

「こんな天気だ。あまり良い日ではないな」

ゆーがそう言ったから、わたしはカバンに傘が入っているの思
い出した。

骨董通りのミュージアムを見学した後、雨があがっていたので散
歩した。渋谷まで行き明治通りを神宮前に向かう。六丁目に差しか
かった景色がわたしは好きだ。新しい建物と外壁に螺旋階段のつい
た古いジャズ喫茶が青い空に浮ぶ。

店は決めている、こっち、とゆーが指差す。ビルの地下に入る。
曲がりくねった突き当たりに小さいカフェがあった。

「何て愛らしいの」

はちみついろのキャンドルが灯って仄明るい。赤いテーブルに着
く。壁面に本棚があり本がいっぱい詰め込まれていた。君に選ぶよ
と迷ってから大判の絵本をわたしに手渡した。わたしは手が震える
のを袖を引っ張って隠しながら、近くにあった文庫本をゆーに渡し
た。

ゆーは、煙草に火をつけた。煙を少し吐き、アクビをした。
色遣いがおかしな絵本。

「本はよく読むの？」

「うん。どんな本もたくさん読むよ」

ランチが運ばれて来た。玄米のキッシュと、オニオンスープ。

「すごく良い本」

「食い入るように読んでたね」

一口食べると、フォークを置いて話し出した。

「俺は、映画を撮っていた。何年か前に、最優秀賞をとって、賞金
も貰った。芸術劇場で上映されたよ」

「すごいなあ」

ジュンくんと出会った四年ほど前のことを思い出しながら、わた
しは言った。

ゆーは足を組んだ。どこで上映されたか、どんな評だったか（絶
賛されたし、酷評も受けた）話した。

「また撮るでしょう？」

「そうだな」

キッシュをまた少し食べ、フォークを置く。

「映画を撮り始めると他のことは手につかなくて、普通のこともおぼつかなくなる。俺はね、黒胆汁気質なんだ。ヒポクラテスは人間を四つの体液に分けて考えたんだよ、知ってる？　どの体液の割合が多いかで、黒胆汁液質・胆汁液質・多血質・粘液質という気質に分かれる。俺は、山羊座で黒胆汁気質なんだよ。黒胆汁は、メラニン・コリー気質なんだよ。鬱さ。年中、沈んでいるんだ。今日で週払いの仕事が終わって、しばらく時間ができるから作品に取りかかる。描くことはあるんだ。アウトプットしていくのが大変なんだよ。アイディアを描かされる奴隷なんだ、俺は。自分が誰だか分からなくならないように、毎朝、起きたら自分が何者か確認しているよ。作品には、小さなことを見逃さずに自分の解釈したことを描くんだ。たとえば佐倉の開拓地のおじいさん」

目玉やきの黄身を切る仕草をすごく上手にして見せながら、相槌を打つ間もなく、ゆうは話し続けた。

おじいさんの手のわずか自由でない理由が、元は左利きだったからなんて、俺は思いもしなかった。どきっとしたんだよ。

「何かを見たときに、これはこうだと決めつけずにさ……どう解釈するのか、言葉を探していくんだ。小さい体験を、自分はどう見たのか。……言葉が整頓できなくなれば精神を病むのさ。分裂症だ。今は呼び名が違うんだったな。統合……失調症だ」

わたしは感心しながら聞いていた。煙草がもつといっぱい燃えかすになると良いなと思って灰皿をいちどだけ見た。傍に置いてあった煙草の箱には『R』と紺色の文字でロゴが入っていた。その箱は初めて見た。

セットのドリンクで選んだソイティーが来たのでカップを口元に近づけた。ちょこっと飲む。甘くておいしい。

「似てるわ。わたしも山羊座よ。黒胆汁気質？」

誕生日を聞くと一日違いだった。一日違えば全然違うとも思う。

血液型は違っていた。

砂糖を入れる必要もないのに、砂糖壺のふたを開けると、愛らしいお砂糖の小さなカタまりとすぐ小さい木のトングが入っていた。「うん。どうかな。きみは胆汁気質かもしれないが、俺は黒胆汁気質だよ」

「ひょっとして、胆汁で競ってる？」

砂糖のかけらをいっこ取って、口の中にぽいと放り込んだ。愛らしいお砂糖は控えめな甘さだった。

「きみの負けさ」

と、ゆうーは答えた。わたしの渡した本を開いた。

わたしも砂糖壺のふたを閉めた。

「これ、読んだことあるの？」

「三ページ。内容はだいたい知ってる」

その本を読んでいないのに好きだった。好きな場面がある。

「全部読んじまわないと良さはわからないよ」

そうね。丁寧に読みなおすわ。と、大きく頷いて返事した。

「俺、これ読んだよ。好きな場面がある」

「ルソーが犬にキックされる箇所？」

「うん」

「やっぱり。似てるわ」

店を出て歩く。明治神宮を歩く。磁場の良い場所とか宇宙とか、そんな話をした。ほとんどゆうーが喋っていた。まんがのルルちゃんがついているトランクからキャンディが出て来るみたいにお話がたくさん出て来た。

「自分の周りのものはすべて自分の一部だと言う考え方があるよ。自分が周囲の景色や人を見てるんじゃないくて、景色もひと自分なんだ。自分を作っている要素なんだよ。全てが関わりあっている。そういう考え方さ」

わたしはなるほどと言った。相槌を打つのは上手くできてないような気がした。話を聞いているのは好きだった。

それから特に方向を決めるでもなく歩いていたら街は千駄ヶ谷に変わっていた。大きな葉をひらひら落とす並木の景色が流れて行く。「オウイ」

カラスだった。葉っぱに紛れて低い枝に停まっている。実際は何と言ったともつかず、へんな鳴き声をあげ羽を畳んだ。

「オウイ」。ゆうが真似をした。「オウイ。人の声みたいだな。公園で顔に新聞紙を乗せて昼寝してるおっさんだ。数日働き詰めでとうとうくたびれ、起きられなくなって、通りがかったひとに助けを求めてんだよ、オウイって。オウイ、オウイ」。ハスキーな声を何度もあげてみせた。

わたしは紐を緩め袋の中に手を突っ込んで言葉を探した。見つからなかった。

「寸劇を見ているみたい」

「演劇のワークショップに通っていた」

明治通りの交差点で信号待ちをする。

「きみは風景を見る時、言葉で見ているだろう」

相槌を打つ隙もなくゆうは話続けた。わたしのことを、きみと言った。いまさら気になった。

「きみは、あれは桜の木だ、まだ花も葉もない、小学校の門だ、道路だ、すずめがいる、と。でも、唯そのままに見るんだよ、あれはなにか考えずにさ」

「なるほど。そういうのは小説作法の本の第一巻あたりに載っているわ」と私は言った。瞬間、音ゲーに例えるなら違うボタン押したような気がした。

「タリーズだ。タリーズを見たら入りたくならない？」

「なるわ」ウソじゃないわ、本当よ。

タリーズで休憩した後、新宿まで散歩して別れた。

タリーズでゆうは、今日まで働いていた印刷工場の人がいかに無能かという話ばかりし始めた。それからわたしのことを作家気取りだと言い、「みんなバカばかりだ!」と言った。

荷物を運び出すまでは合い鍵を持っていた良かった。

「なんで君そんなところに住むの。割高でムダだよ」

原宿に部屋を決めたことをジュンくんが咎めた。大学時代に過労で死んだ父の遺産で暮らすにしても底を尽きる日が見えている。原宿に住むのは身の丈に合っていなかった。

「ひとと別れるなんてことはもうイヤよ。耐えられる自信がないの。だから気を紛らわせていられそうな町に住むの。今は悲しすぎて何も考えられない状況よ。でも時間が経つにつれて憂鬱が手に追えなくなるのがスゴク怖い。わたしは失恋で二年くらい落ち込み続けたことがあるわ。父の死は半年よ、でもまだ完全には立ち直れていないわ。もう二度とあんなことは……わーん」

君は「エーン」と言って泣く。そんな子はじめて見たよ。お父さんが死んだのは君のせいじゃないよ。家族が死んだら身近なひとが自分のせいだと思いやすいんだ。そんな優しい言葉をかつては言ってくれたけれど、思い出したところで、蔓草で出来ているつり橋を渡っている気分には違いはなかった。

ジュンくんは、「泣くことじゃないよ。別れるんじゃないよ。しばらく距離置くんだよ」と言った。デッドエンド。ユー、シュッド、ダイ。

死ねわたし。死に腐れ。わたしは念じながら、荷造りのためにお茶のペットボトルが入っていたダンボール箱を板状から箱形に作ってテープで張っていった。

「はい、これ君の」と、ジュンくんがわたしに手紙を差し出した。れい君の手紙だ。わたしはダンボールに入れず、いつも持ち歩いているカバンに入れた。

晩ご飯は回転寿司に行った。

「たまにはかっぱ寿司まで歩こうよ」

歩いて三十分くらいかかる。東京湾沿いにある、ららぽーとにだって行けそうよ。

「わかったわ。デザート全種類食べるわ」

「やめなつて。まあいいや」

わたしは、杏仁豆腐やケーキをいっぱい食べた。

「君ねえ。まあいいや。及川がさ、結婚したよ。太ってた。髭を生やしていた」

いつの間にか、及川と飲みに行っていた。海外で式を挙げた話などした。

「意外だろう」

「意外だわ」

ジュンくんのイメージで及川を知っているだけなせいか、わたしはジュンくんと感想が一致した。

「俺もケーキ食べよっかな」

アップルのノートパソコンを抱えて歩く。靴はもう三足くらい履きつぶしていた。靴底のすり減った部分ってどこに行っちゃうんだろう。

代々木公園近くのアパートから三十分以上かけて千駄ヶ谷の整体院に徒歩で通い、仕事の後は、無料で無線LANが使える原宿のカフェまで毎日、歩いて行った。自宅のネット環境が整う予定日は一月後だった。

雨宮さんからメールが来ていた。原稿の催促だった。鹿蹄山の画像が添付されていた。ミステリアスな公園の写真で、光の玉が写っていた。この公園は、開拓地の人口がピークだったときに、小さな子供の遊び場として市が作ったのだそうだ。今は小さな子供が居ない。光の玉は水滴にも見えるし、UFOにも、何にでも見える。きれいに撮れている。

有理さんが記事を書いた雑誌をさつきコンビニで買い、カバンに入れていた。

鹿蹄村のおじいさんとおばあさんの夫婦愛が記事になっていた。見出しは『日日は好日。毎日が良い日です!』。れい君の手紙を折れ

たりしないようそのページに差し入れ、閉じた。

ノートパソコンを開く。

「ふられてやんの。ぷぎゃー。」

談話室キタムラの掲示板の一つにわたしは書き込んだ。自嘲。強がり。

文芸サイトを開いてみたら、掲示板に『好川夢子さんって今なに
してるんだろ』と書いてあった。何も書き込まずに閉じた。

その後、パソコンを抱えたまま月夜を散歩した。月がきれいだ。
泣きながら歩いた。考えてみれば、今日だって無事でたぶん良い日
だ。会ったこともないけれど、鹿蹄山のおじいさんの顔が浮んだ。
そういえば、カバンの中に願望の箱があった。願望の箱自体は何
もしてはくれないので、あってもなくてもいいのだけれど。願いを
求めてみようと思った。

叶えたいことを願ってみると宇宙に拡散しないように抗っている
感じがした。

生きている感じがする。

〈了〉

参考にしたウェブサイト

http://ja.wikipedia.org/wiki/犬
鳴峠

http://2ch.myuk.co.jp/mirror/
941278892.html

http://8.protok2.com/~miyawak
a/inukaitaku.html

(後書き)

感謝。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3733ba/>

すばかり

2012年1月9日19時49分発行